

子女國文教科書

修正六版

卷五

3759
D219
資料室

42144

教科書文庫

4.
810
42-1917
20000
46547

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

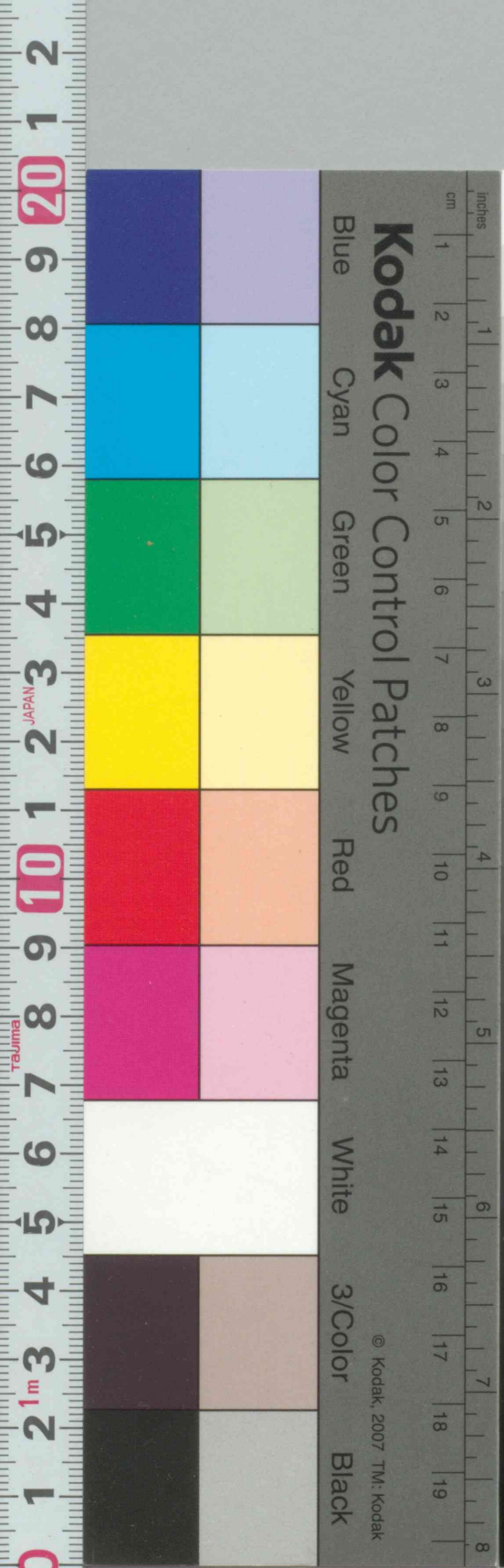


© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



資料室

3754
S219

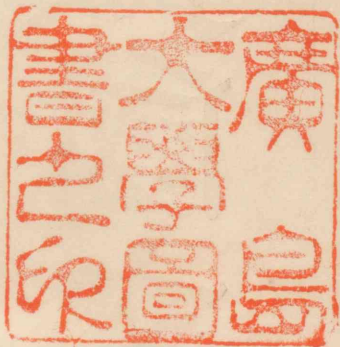
文部省檢定
高等女子學校國語教科書 大正六年一月三十日

女子國文教科書

文學博士佐々政一編

卷五

東京 光風館藏版



子女國文教科書修正六版卷五

目次

一 國花……………	一頁
二 風流三題……………	五
三 春の廣見……………	八
四 畝傍の山陵……………	一四
五 奈良……………	一七
六 旅行の心得……………	一九
七 封建時代式の行列道中……………	三

目次

八 封建時代式の行列道中……………六

九 封建時代式の行列道中下……………三七

一〇 書翰文の作法……………四三

一一 孝子要吉……………四六

一二 誠……………五三

一三 農人形……………五六

一四 吾が輩は猫である……………六〇

一五 うれしさ……………六五

一六 風と露……………六八

一七 須磨の浦……………七三

一八 須磨の嵐……………七六

一九 皇國の姿……………八一

二〇 比叡山の杜鵑……………八二

二一 梅雨の後……………八七

二二 草とり……………八九

二三 歐洲大戰の起因……………九三

二四 赤道附近の晝夜……………一〇三

二五 馬琴日記鈔……………一〇七

二六 時 閒……………一一二

二七 天龍川……………一二七

二八 風俗の變遷……………二九

二九 麥藁帽子の傳……………二五

三〇 旅にある友へ……………二六

三一 世界の歌枕……………三三

三二 黃菊白菊……………三四

目次終



子女國文教科書 修正六版 卷五

一 國花

我が日本の國花として世界に誇るに足るものは櫻であらう。今、支那で櫻桃オウゴンといふのが櫻に相當するといふことであるが、それも日本の花の美しさには及ばないとのこと。西洋のチェリー* Cherrv.も實は大きい花の色は薄い。爛漫と咲亂れた櫻花の山を埋め、谷に満ち、雲とまがひ、雪とまがふ景色は、日本特有の美景である。

支那の國花は牡丹である。その濃艶な粧は美しいに相違ないが、あつさりとした日本趣味には適しない。香氣鼻を衝く薔薇の色も棄てがたく、美しいものであるが、これも艶冶の態があつて、清楚人を動かす野趣に乏しい。しかし薔薇は歐米人の花の王と稱するものである。

日本の櫻はその色は極めてあつさりとして居る。但し純白では無い、いはゆる櫻色である。その瓣は極めて薄い。一樹に無數の花を著けて、咲く時は一時に、爛漫と、殘なく咲く。上品な大宮人の風もあり、楚々たる野趣をも帯びて居る。空青く水清き日本の氣色には最もよく釣合つて、深山・都市どこにあつても皆宜しい。廿日草の長い盛もなく、薔薇の花の高い

(二) 櫻散る木の下風は寒からて、空に知られぬ雪ぞふりける。(拾遺集、紀貫之)

(三) 日本書紀允恭天皇の條に、「花ぐはし櫻のめて、云々」の歌あり。

(四) 照りもせず曇りもはてぬ春の夜の朧月夜にしくものぞなき。(新古今集、大江千里)

(五) 加茂真淵の歌。

香氣も無いが、とにかく見事である。その散つて、空に知られぬ雪と降つては、一段の風趣があつて、殆ど言語に絶してゐる。日本の花は櫻である。古く「花ぐはし櫻」と歌はれたのは、蓋しこれがためである。

櫻の咲くのは春の末である。春の日本は水蒸氣が多い。どんよりと曇つて、寒くもなく、暑くもない日和を花曇といふ。夜は照りもせず、曇りもせぬ朧月夜、雲霞とまがふ花には最もふさはしい景色である。春の特色は、どこまでも、駘蕩といふ點にあり、温和な所であり、峻嚴猛烈といふ心の微塵も無い所にある。櫻はこの時候に孕まれて咲出づる花である。きは立つた特色の無い所が即ちその特色である。うらくと長

閑けき春の心より匂ひ出でたる山櫻花」といふ歌などが、最もよくその特色をあらはしてゐる。

八田知紀の歌。

松尾芭蕉の發句。

鐘一つ賣れぬ日はなし、江戸の春。(榎本共角)

「吉野山霞の奥は知らねども、見ゆる限は櫻なりけり。」これは満山、櫻に包まれた吉野山の景色を詠んだのである。花の雲、鐘は上野か、淺草か。これは「鐘一つ賣れぬ日も無き」大都會の花に掩はれた光景である。櫻は牡丹、薔薇のやうな、花瓣を賞翫する花では無くして、木として賞翫する花である。否、多くの木を集めて、人は唯花中に在つて賞翫する花である。上から下を見て愛でる花では無くして、下から眺めて愛でる花である。春風四月、日本人は暫し花の世界の人となるのである。(芳賀矢一「月雪花」)

二 風流三題

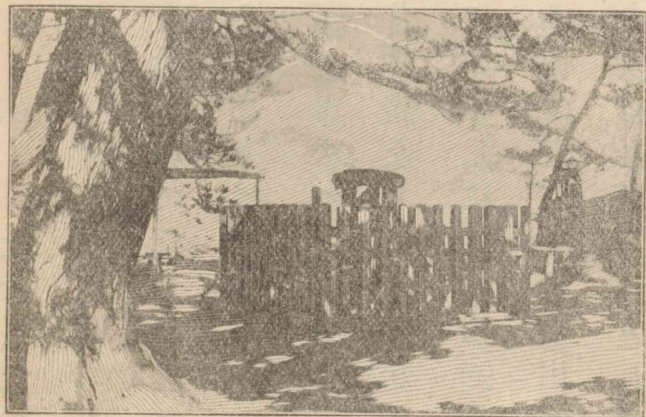
一 落花

八幡太郎義家、勅を奉じて清原武衡・家衡等を征伐せんとて、京都より陸奥に下りける途すがら、常陸・陸奥の國境なる勿來關に來かりけり。

勿來關址

頃しも彌生の空のどけくて、雪か
とまがふ落花、馬蹄を埋めければ、
義家はとりあへず。

(四) 現今の磐城國石城郡にありき。



吹く風をなこそその關とおもへども、

みちもせに散る山ざくらかな。

と詠みいでたりき。猛きものゝふの胸中にも、かゝる優しき心はありけるなり。

二 朝顔

昔、俳諧など好ける女ありき。ある朝、水を汲まんとて井戸端に到りしに、傍なる朝顔の蔓、いつの程にか釣瓶の竿にからみ付き、花二三輪咲出で、露を帯びたる風情をかしかりけり。女はしばし見とれてありけるが、やがて、

朝顔に釣瓶取られて、もらひ水。

と口ずさみつゝ、鄰家に行きて水を貰ひけり。句は稚なけれ

世にこれを加賀の千代といふ。

ど、人柄いとゆかしからずや。

三 紅葉

高倉天皇は御幼少の時より寛仁大度におはしましき。ある年の秋の朝なりき、風吹荒びて冷かなりけるに、御庭を掃除し居ける仕丁ども、何心なく紅葉の枝を折焚きて、酒をあためけり。

此の紅葉は天皇の殊に愛でさせ給へるものなりと聞くや、いかなる御咎めあらんかと、仕丁等は安き心もなかりけり。天皇御年なほ十歳ばかりにおはしけるが、此の事を聞しめして、御機嫌いと麗しく、「林間酒を煖むるに紅葉を焚く。」といふ古人の句を、誰か仕丁どもに教へたるぞ。やさしきことか

人皇第八十代(仁孝) 八三一(西)

白樂天。

な。と仰せられて、何の御咎めもなかりきとぞ。

三 春の廣見

*
名古屋市東本願
寺別院。

天神様の御祭に少し遅れて、おかけ所の彼岸櫻が咲いた。お彼岸参りかたゞ、花を見る人、花見かたゞ、お彼岸参りする人が續いた。おかけ所近くは埃が賑やかに立つて、ここに夥しく乞食が居た。お彼岸にこの町の人は始めて郊外を見るのであつた。彼岸と郊外は動かぬ聯想であつた。

「おかけ所の山門を出て、そこにしだれ櫻の古木が竝んで、うす赤い花をつけてゐるのを見ると、心が浮立つた。山門の向側には古い黒い講中會所が長屋のやうに竝んで、山門側は

ずつと高い白い土塀になつて居る。この狭苦しい中に櫻が咲いてゐるのだ。花の下に席をとつて眺めることは許されなかつたので、皆眞面目な顔で花を見て通りすぎて、東裏門に出る。私は毎年一度は花時にこの東門をくゞるのであつたが、いつもこの門に立つとはつとして、眼前の景を始めて見るものゝ如く新しく感じた。



名古屋市東本願寺別院

こゝがこの町の東端で、しかも道を隔てた向側はずつと低地になつてゐるので、廣い田圃の景色が、くつきりと鮮かに展開された。青々とした色と水の光とがそこに錯綜して居た。そこゝに人家が一村づゝ仕組繪の様に見えた。家のある所を少しはなれたあたりに、ゆつたりと枝を張つた老松があつた。遙か稍高みになつてゐる村の邊に、晒布が雪の降つた様に見えた。そして丁度地平線といふあたりに、濃い赭色の八事山が低く細く横はり、その上に、空へ描いた様に猿投山・大草山などが聳えてゐた。この門を潜つて段を下り、道を横ぎつて、その道の東側に立つと、更に南北の眺が廣がる。この位の眺望はどこの町の郊外にもあるといふことを、稍

*横井氏。俳文の名家。(三六十二頁)

長じて旅行してから知つた。併し全くの平地で、町の中に少しの高みもなく、自分達の住む町の形をも眺め得ぬ名古屋人にとつては、こゝの眺は心を根柢から快活ならしめて、眞に自然の色彩に驚歎せしめた。かの也翁^{*}の住居はこゝの少し東北に在つたので、翁が「知雨亭記」に、

「門を出て東北の方、しばらく十歩の杖を曳けば、指頭萬疊の山横ほれ、眼下千町の田つらなり、村落畫圖の中に入る。南は高倉の森高く、鳴海の浦風も通へばや、熱田瀉も名のみして、夏も夏知らぬ日多かり。やゝ賤が屋の蚊やりも細りて、衣うつ聲、蟲の音もよそよりは早き心地するは、夜寒の里も近ければならし。」

とあるのは、即ちこゝらの景色である。その夜寒の里の名はこの邊りの陶器に残つて、「夜寒焼」と稱してゐた。今はどうであらうか。嘗てはこの邊りの田圃に面した藁葺の家で、それを造つてゐた。陶器好の父は、よく私を連れてその家に這入つた。お爺さんが黄いろい胸をはだけ、胡坐をかいて、面白く轆轤を廻して、灰色の土の塊を色々な形に拵へて居た。

同じ也有翁がつい近所の分平庵の主人に句を求められて、「四時の多景、何れをかわきていふべき。されど庵近きよしみもあれば、つれなくいなび難く、只眼前の姿をいふ。」

繪の中に動くものあり

として、下五文字に掛けはづしの自由あり。春は田螺取と

すべし、夏は早苗取、秋は木わた取、冬は大根引と置換へて見よ。一物四様にはたらきあれば、句の拙きをいふべからずと、傳授の一語にまぎらかして贈物とはなせりけり。」と書いたのもこゝらの景色である。

「廣見」といふのが、この門前一帶の地名であつた。廣見餅といふうまい餅を賣る舊家が、この寺の南に在つた。その家からは眺望が出来ぬ。この餅の出店が、葎簀ばかりで門の直ぐ前に出る様になつたのは、餘程後のことで、前にはこのあたりに眺望を妨げるものは何もなかつた。春の日が靜かに照匂つてゐるこの廣見のひろい道をお守を入れた大きな巾著を腰にぶら下げて、よちよち歩いてゐた私の姿を今思ひ出す

と、私は胸が一杯になる。(沼波瓊音)

四 畝傍の山陵

畝傍山の東北の地數町を占めて、瑞籬いと貴く結ひめぐらしたるは皇祖神武天皇の御陵なり。われら旅衣の塵打拂ひて御前に額づく。おもふ昔、天皇、天祖の遺訓を奉じて、こゝに皇基を定め給ひしより、今に至るまで殆ど三千年。君臣の分明かに、父子の親厚く、世界にたぐひなきこの一大帝國を成し給へり。われらこの國に生まれ、この君の御流を奉じて、この土に生育する者、この御陵を拜して、いかでか限なき感慨胸に溢れざらん。拜し終りて、伴へる者のよめる。

古をしのぶ袂に

通ひけり、

畝傍の山の

峯の松風。

萩^{*}の家、しばし空うち眺めた
りしが、

・ 畏くも額づく袖に

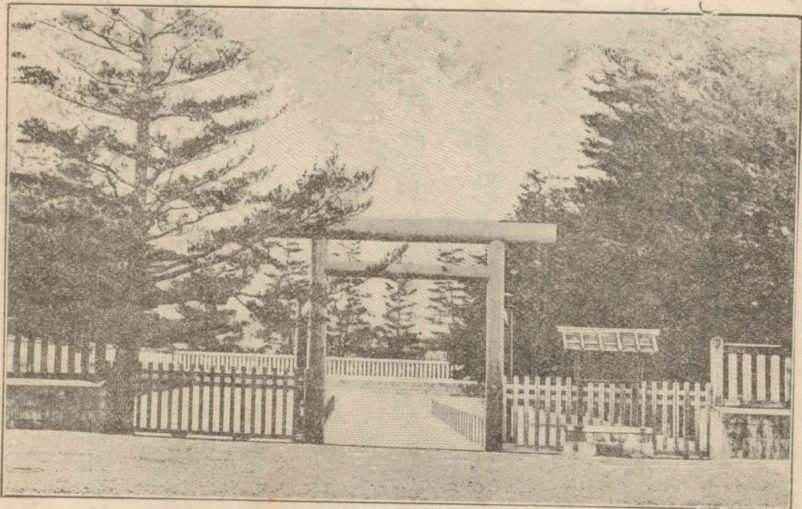
散りにけり、

畝傍の山の

松の下露。

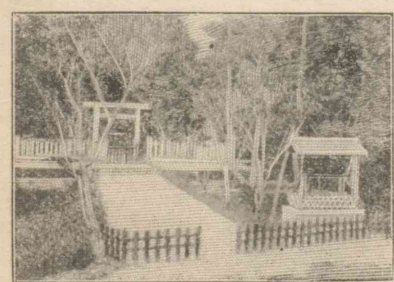
などいひてやうくに御前
を退く。

^{*} 落合直文の家
の名。

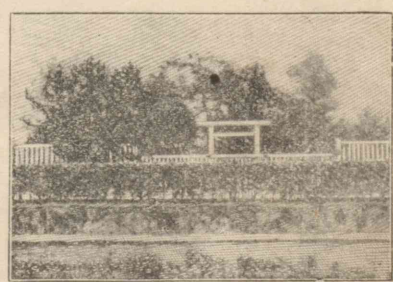


畝 傍 の 山 陵

そもく中古以來、王室衰へさせ給ひてよりは、歴代の帝陵定かならざるものゝ多かりしのみか、この御陵さへほとく知られざる程にて、里人はこゝを、じんむ田など、唱へ居たりとなん。さるを王政古に復りてより、今はかくめでたくしなさせ給ひしかば、なにの思ふ事もなけれども、なほ隴を得て蜀を望む人情よりいはんに、この畝傍山の全體を悉く取入れて、瑞籬廣く結ひめぐらさばいかに。さるは伊勢の神宮と相竝びて、その神々しさも一しほまさりぬべく思



安天天皇御陵



高天天皇御陵

(一) 大和國高市郡白檜村。
(二) 大和國磯城郡初瀬村長谷觀音。
(三) 同郡耳成村にあり。
(四) 同郡香具山村にあり。

へばなり。

さて、綏靖安寧二天皇の御陵を拜みて長谷の方へと志す。耳無山・天香具山右左に見ゆ。古きことなど更に思ひ出で、語り合ふ。夜になりて、觀音の前なる宿につきぬ。(落合直文)

五 奈良

一

嫩草山も 春日野も 霞こめたる 春景色、古き都の名残とて、花は昔の色に咲く。古人曰へらく、「奈良七重、七堂伽藍 八重櫻。」

二

(六) 芭蕉の句。

紀元一三九〇年
代。

燕村の句。

大佛殿に、佛燈の 光は今も
かゝやきて、正倉院は、天平
の 昔を固く 封じたり。古
人曰へらく、「蟲干や、甥の僧
訪ふ 東大寺。」

三

鹿の鳴く音に 誘はれて、三
笠の山を 離れけん、満月は
やく、猿澤の 池の水の面に
浮びたり。古人曰へらく、「仲
磨の魂祭せん、今日の月。」

燕村の句。



池の澤猿

几童の句。

佐保の川原は 水あせて、石に嘯く 音静か。顧みす
れば、葛城の 山のいたゞき 雪白し。古人曰へらく、
「大佛を 見かけて遠き 冬野かな。」(文部省國定讀本)

六 旅行の心得

旅行して口惜しきは、我が財をもつ事少なきよりも、我が學
を積めることのいまだしきなり。歴史に詳しく通じ居らん
には、わづかに遣れる、古の河の流、城の墟、或は破れたる寺、頽
れたる塚などに臨みても、限なき感を起し、人知らぬ興をお
ぼえて、身にしみ心に留る事も多かるべきを、何事のありし
處とも知らず、我が學の疏きま、趣味も無く、草鞋のみ數多

くはき破りて、そこくに通り過ぎなんは、口惜しきことの一つならずや。地理をよく知らんには、路の通塞をも難易をも胸に曉りをれば、日暮に猶宿るべきところを得て迷ひありくなどいふ、愚かしき目にも會はず、唯わづかの迂路せざりしたため、惜しき名勝を見落すといふやうなる事も無く、よろづにつけて心たしかに、便多かるべきを、地理に暗きため、あらぬ心づかひをなし、良からぬものに欺かるゝなど、口惜しきことのかぎりなり。

草木禽獸につきての知識乏しければ、總ての物を大様にのみ見て過ぐすほどに、異なる郷の珍しき花禽を目にしなから、唯、紅き花咲き居たり、白き禽翔け居たり。とばかりおぼえ

て、何一つ明かに識るといふことなく、後に人に問はるゝことなどあらん折、知らず、知らずとのみ答へんは、これ亦口惜しからずや。又、農工の事につきても、畫彫刻の道につきても、すべて我が學淺ければ、我が趣味の乏しきまゝ、我が興も薄く、千里の路を行きて、疲勞のみ覺えたらんは悲しからずや。無學にして旅するは、恰も盲人が花の林行くが如く、すべての美しきものをも認めずして過ぎん。

學問は、急に如何とも爲しがたし。されど注意といふことは、我が心の置きかたにて、深くも淺くもなるべければ、旅にありては、如何なる物にも事にも、勉めて深く注意すべし。注意は知識を生じ、やがてはその人を趣味豊かなる人となして、

すべての事物につきて、興を多からしむるものなり。學淺くとも、注意だに深くば、旅はなかく興多くして、しかも旅したるがために、少なからぬ利益を得んこと疑あるべからず。

(幸田露伴)

七 封建時代式の行列道中上

文學博士黑板勝美。
箱根山下の温泉場。

黑板博士は豫て雲助と云ふものに趣味を有たれて、若し生存者があるなら、親しく語り合ひたいと望んで居られた。然るに今年の元旦湯本に遊んだ序に、ふと此の會合の實行を思立つて、夫々呼集められると、六十九歳を年長に六十歳までの者總て六人、何れも険しい山阪に、例の長持唄に自慢の

聲を張上げて、飛ぶが如くに歩いた手合が、打揃うて博士の旅宿に參じた。博士は酒肴を振舞つてとりよりの昔語りをさせ、やがて得意の唄をと所望すると、少しは唄つた者もあつたが、實は是では道中の眞に迫つて居らぬ。重い擔棒を肩の肉に喰込ませ、息杖突いて登りながら唄はないと、思ふ自分の聲が出ないから、成らうことなら一度昇かして呉れまいか。と、却て先方から望んだので、博士も大いに興を催し、よし、然らば花咲く頃に、同志を募つて古風な道中をして見よう。と約した果てが、雲助會の成立となり、若葉の薫る端午の日に、駕行列の道中をする事となつた。

駕行列の出發

湯本より少し上
にあり。

雲助會員の數は催主の黑板博士を筆頭に十四名、五月五日の早朝、塔（二）の澤の温泉宿を發足して、出發點と定めた湯本の三枚橋に集合した。なるべく徳川時代の形を表さうと云ふので、第一には例の大名長持、萌黄地に定紋を染抜いた油團をかけ、矢車におかめの面打つた扇、青紅二色の幣を立てた頗る重いのを先頭に立て、十三挺の駕を一行に並ばせた。前代の雲助たる老人六人は世話役となつて、他の二人の肝煎と共に駕側に隨ひ、また此の道中の寫生を擔任された百穂君と寫眞係とは、同じく徒歩で側に附いた。昇手は勿論、世話役、肝煎は一樣に赤手拭の鉢巻で、午前七時二十分と云ふに、威勢よく山路に足を向けた。此の人數總て五十一人と注

畫家、平福氏。

せられた。

茲で一寸雲助の粧を述べて置くが、昔は足を山路に入れると同時に、彼の俱利伽羅紋露（し、だ）出しの、禪一貫に細帯のみの裸になつた。而して裸體の時と襦袢を著けた時とを問はず、六尺を肩にする場合は必ず帯の端を垂したさうな。それはどう云ふ譯かと聞くに、一體雲助なるものは、人間社會の除外物のやうに蔑視され、彼等自身も亦其の侮蔑を甘受したもので、我から馬になつた意で、尾に擬へて帯を垂したものだ。又乗手が駕を出る時など顔を見せては禮を失すると云ふので、故と尻を向けて居る。又さあ棒鼻を揚げようと云ふ時は、後棒のものが馬を追ふ心持で、しっく〜と聲を掛けたと



大名行列 (廣重筆)

云ふ事である。
 朝風に面を拂はせて山道
 に向つた一行は、威勢の好
 い事は言ふばかりない。朝
 立の祝酒に勢を附けた鼻
 手の足竝は、息杖と共に小
 刻みに揃つて、石の高い悪
 路をすた〜駈ける。長持
 の矢車はから〜と廻る。
 幣の色紙が朝風に靡く。三
 枚橋の村落を離れると、自

分などは早くも名所圖會中のものとなり、又大名になつたやうな心地がした。

參觀交代が絶えた以後、此の様な事をして箱根を越えたものは曾てない。されば當時を知る故老も珍しいとて出て見る。況して若い者は猶更である。行列が橋を中心に勢揃をした頃から、多数の頭取が「越すに越されぬ」と續けると、其の末尾の「ぬ」が消えぬ中に、昇手が肩を入れ代へる。駕がゆらりと肩に乗ると、「えっく〜く〜」の掛聲で、息杖の突き加減から足の運び、扱は腰の捻りやうから頭の振り工合まで、訓練された兵士のやうに規則正しく揃ふ。

普通の掛聲は「えっく〜く〜」と「けっく〜く〜」と「へっく〜く〜」

との三様で、三種とも平坦な處を歩く時に使ふのであるが、今一つ「へちよくく」と云ふのがある。これは峻しい阪に登る時の聲で、前の變化のない聲では勢が附かぬから、「へちよ」を句切りよく續けるので、外に意味はないと云ふ。なるほど「へちよ」の時には足踏が違ふ。やがて村落を離れて、早雲寺前へと進んだが、若い者や子供がぞろぞろと跟いて来る。頭を捻つて前後を見ると、まるで繪巻物を見るやうである。

八 封建時代式の行列道中

舊道第一の嶮岨

今日は朝からの曇天、風は山路の若葉をざわ／＼と鳴し、長

持の幣をちぎれるほどに吹靡かせる。雜木茶屋近くなると、石高路の兩側には年古りたる杉竝木、駕から仰ぐ梢の上には、峯を落ちるちぎれ雲が絡まつて、竝木の間の草原には藪蘭の花が眞盛りである。烈風が竝木を叩いて過ぎる間々に、急雨のやうに聞えるのは、右の谿間の奔流が石に激する音であらう。

一同雜木茶屋で駕を出た。茶屋の婆さんは六十五歳、矢張大名道中の光景を時偶記憶の底から呼起して、舊道の寂れを歎ずる一人である。わしらあ若え時は、とのべつに昔戀しい懷舊談を聞かされて、相共に變遷の速かさを語る。やがて可い加減に澀茶に飽くと、いざ出發と聲が掛る。

是からの上りが箱根の箱根らしい處になるのである。阪は高低漸く烈しく、木立古く石古く、雲飛迷ふ梢の上から暢氣な鶯の聲が聞える。駕側の世話役は行く／＼案内の勞を執る。旦那様、是は曾我の五郎の槍突石と申しやすが、力試しに二突き突いたと申しやすが、此のとほり槍の跡が遺つて居やす」と得意なものだ。それから「覽勝五郎の小屋がけ石」だの、「頼朝公の杵掛石」だのと、一々由來を説いて聞かせる。行列はこんな事に一寸暇を潰しながら、石高路を例の「へちやく」で上つて行く。

須雲川で稍長い野立をして、畑宿に著いたのは九時半頃であつた。此處には昔の本陣が二軒とも残つて居る。上り下りの諸大名は必ず此處で小憩して、雲助どもに腹拵へをさせたものだ。我が行列も其の例に倣つて、盛に彼等に詰込ませた。宿は端午の休日として、袖のある著物を著た老若が、五月鯉を吊つた狭い路に押合ひ揉合ひ、立淀んで、珍しい行列を眺めるのである。

畑宿を出ると、程なく檜木阪に差しかゝる。是は箱根第一の峻阪で、胸突くばかりの嶮しさだが、昔は此處丈は長持を毀してもお咎めがなかつた。又駕訴も同様罪に問はれなかつたと云ふ事である。谷を隔て、左に近く、白雲亂れ飛ぶ邊は關白道と云つて、豊公が小田原攻に通つた險阻である。此の阪を越すと、皂莢阪、雙子の下に蜿る白水阪と共に屈指の難

所なので、昔は旅人がよく強請ゆすりに遇つたといふことである。駕に吊られて山深く分入つた時、強請られたらどうしようかと考へたら、誰しも頸許の冷つく感がしよう。自分も一寸其様な事を想像して見て、鬼の様な荒くれ者が、怖ろしい髯面に氣味悪い笑みを浮べて、酒手を遣つてお呉んなせえ。」と駕を覗く様が目に浮ぶ。となると、人跡絶えた深山なれば、助を呼ばう術もない、否でも應でも財布をはたかねばならぬ事になる。さういふ風な想像を描くと、芝居で見るやうな旅人の困つた體や、美しい足弱の脅かされる體などが、髣髴として見えるやうだ。併し乍ら彼の雲助と云ふ輩は、其の凄味文句を列べるのを日常茶飯の事と思つて居た。天下御法度の

賭博を默許された彼等だから、強請位は悪事とも思はなかつた。

だが段々聞いて見ると、芝居で見る程怖ろしいものではなかつた様だ。強請ると云ふと物凄いが、其の金高は多くて二分位に止つたのである。其の證據は彼等に特有な例の符牒である。黑板博士の調によると、雲助仲間には二分以上の符牒がなかつたと云ふ。

關所の址

其様な事を考へて居る中に、白水阪も何時しか後になり、駕は烈風に送られて、權現阪にと差懸つた。一路眞直に下る處、轟々と立つ杉木立越しに蘆の湖面が展がつて來る。昇手も

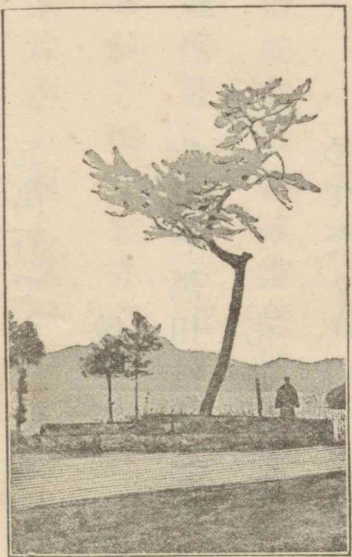
乗手も勢が加はつて、急げくと急ぎ合つた。矢車の威勢よく廻る長持に續いて、十三挺の山駕が瞬く間に阪を下り、元箱根を右に見て、竝木の中に入らうとすると、其所へ町長松岡廣吉氏が出迎に來て居られた。一行は駕の上なればと、形式ばかりの挨拶をして、箱根の宿へと急いだ。

やがて關所の廢址に著くと、此



(るよに卷圖里八根箱上) 所關根箱の時昔

處で暫く昔を偲ばうと云ふので、一同駕を駐めさせる。苔のついた石垣の傍、一本侘しく風に揉まれて立つ老松は、當時の面影を偲ばせる唯一の記念ださうな。あはれ、關守る武士



箱根關所址

が弓鐵砲嚴めしく竝べ立て、威儀嚴然と構へ込んだ昔はどんなであつたらうと、うつとり考へる頭上に、時の力を聞け。と云ふや

うに、淋しい松風の音がした。

關所の址で、四十人近くの世話役昇手一同が我等に促されて唄ひ續けた。昔を偲ぶには此の上なき場所、彼等も參觀交

*箱根八里は馬でも越すが、こすに越されぬ大井川。

代の面影を目に浮べて、知つた限の數々を聲張上げて唄ふのである。其の中で眞の雲助唄らしいのは、彼の「箱根八里」を第一として、

五萬石でも岡崎の殿は

城の下まで船が著く。

安藝と黒田は國遠けれど、

花のお江戸ぢや軒ならべ。

めでたくの若松様は

御知行ますく年々に。

の三つ位に過ぎなかつた。

やがて其處を後にして、箱根宿の御本陣鎌倉屋に遡込んだ

のは十二時十分前の事であつた。

九 封建時代式の行列道中下

箱根宿の本陣鎌倉屋には、大名道中に關する書類を山なす程所藏してゐる。夫は勿論記録と名づけられるものではないが、それでも格式や作法の仰々しかつた當時の様を、此の斷片から聞く事が出来る。一行は數知れぬ故人の筆蹟を一覽して、種々の想像に耽つた。鎌倉屋の老主人と松岡町長とは、代るゝ昔話をして聞かせる。茅葺の頑丈な建物は幕末以來の色に古りて、中には大名の席とした上段の間も残つ

て居る。縁側に續く葦の湖對岸の連山、權現の森、いづれも昔を今の色に見せて、我等が懐古の念を一入強からしめた。午後一時、行列は本陣を出發した。振舞酒が好く利いたので、世話役の爺さん、雲助時代に若返り、長持の衆も昇手の組も足許少々危くなつた。併し元氣は中々よい。自慢の咽喉を拜めとばかり、更めて繰返す唄の數々、宿の男女をぞろ〜と後に跟けて、以前の關所の址に著くと、記念の撮影となる。關所を後にしたのは二時近い頃であつた。右に岩山躑躅、左に湖水を望む杉竝木を通り抜けて、元箱根に差しかゝつた頃は、朝來の曇天は彌、險惡になつて、湖上に雲が飛んでゐた。世話役の一人、一つ〜駕を覗いて、帽子を飛ばされます、御用

心なせえまし。と忙はしく觸廻る。驚破と思ふ間もあらせず、富士嵐と思はれる烈風一陣、控と横なぐりに吹いて來た。豪雨の如き響をするは湖上に騒ぐ波の音である。怪獸のやうな異形の雲が幾つも〜飛んで來て、家々の屋根に衝當つてすう〜と消え失せる。辟易して蹙める横顔へ、風は砂を叩きつける様を痛みを與へる。自分は固く腕拱いて眼を閉ぢて居ると、駕は何時しか新道の阪を登つて居る。荒れ模様、に辟易して權現詣は見合せとなし、蘆の湯さして急ぐのだ。冷い雲に醒されたか、昇手は宙を飛ぶ如くに急ぎ始めた。音に聞えた賽の河原は舊道と背中合せ、庄司ヶ池の上に沿うて雙子の峯を挟んで居るが、折しも名物の雲簇り飛んで、山

色更に辨じ難く、目には長持の矢車の雲中に廻るのが見えるばかり、耳には轟々と響く風音の中に「へちよ〜」の掛聲が聞えるのみだ。斯うなるともう大名心地が去つて、早駕に揺られる古武士の道中が思はれる。

筆序だから茲で大名の山越しを言ふが、諸侯の乗輿は定紋打つたる美々しいもの、お六尺四人で昇いたものだ。それで其の昇き様が又むづかしい。殿様の身は始終水平に置いて、肩が代つても乗手に分らぬやうにせねばならぬ。是が雲助の最も困しむ處で、是を必須の課程として、稽古を重ねたものである。先づ駕輿の中に體重相應の石を置き、それに水を充した茶碗を乗せ、水を溢さぬやうに歩いて行く。さうして

修業を積んだ上、お六尺となるのだが、前後の二人打番ひに肩をかへ、片手を開いて棒に當て、片手を同一の速度に振つて聲を立てずに歩いたものだ。それから阪道にかゝると、後棒の者が片手で棒をさし舉げる。息杖を用ひてはならぬのだから極めて困難である。そこで力をつけ呼吸を合せる必要から、阪だけは已むを得まいと言ふので、掛聲だけを許された。其の掛聲は「とこよいとこ、よいとこな」と云ふのである。調子の整つた三味線にでも合ひさうな聲は、流石に優美な處があつて、今の「へちよ〜」の比にあらずである。

下りは早い。おまけに日の暮れぬ中に下らうと急いだので、蘆の湯邊で駕と長持とが前後した。やがて駕の衆が後れた

長持を迎へて来る、やつと行列を立直して宮の下へと遡込んだ。此の邊は頂上の風も知らぬ顔に西日が美しく照つて居る。一行は長い我が影を踏んで、眞直に塔の澤まで下つた。やれ疲れたと駕を出ると、宿屋の時計が五時を打つた。行列道中の清興は長く我等の記憶に留るだらうが、前代の雲助六人の歴史は恐らく之が終であらう。(萬朝報に據る)

一〇 書翰文の作法

すべて文章は辭簡にして、よく意を盡すを以て理想とすべし。就中、書翰文は簡潔を以て主となすべし。多くの場合に於て、文句の冗長なるは好ましからず。ある人は、書翰の短きは

人に對する尊敬若しくは愛憐の情薄きに似たりと誤想するものあれど、辭簡にして情多きは、情少なくして辭多きに比すべくも無く立勝れり。情の厚薄は、辭の長短にあらずして、意の如何にあり。書き列ねたる文句のみ如何ばかり長ければとて、其の情濃やかならざらんか、そは唯繁文縟禮に終らんのみ。

世に事の繁き人は、一日の中にも數通若しくは數十通の書翰に接す。是等の人々にして、徒に長く、くだくしき書翰にのみ接せんか、一々それらを披見するは恐らく一つの苦痛なるべし。然るに世に事業をなさんとする程の人は、如何に苦痛なればとて、我に來る書翰を委しく披見せずして止む

が如きことはなからん。さればかゝる人に向ひて、繁文縟禮を重ぬるは、誠に心なき所爲なりといふべし。よしやさる身の際ならぬ人に對しても、交通日々に頻繁を極め、何人も時閒を貴重せざるべからざる今日にあたりて、益なきことを長々しく書きつらぬるは、如何なる點よりするも、決して賞すべきことにあらず。要するに用事を以て旨とする日用文は、なるべく簡單にして、事の誤解を生ぜざらしむるを以て主となすべし。

次に趣味の書翰、純粹の用事ならざるものゝ如きも、長きはあまり好ましからず。これもなるべく簡單明瞭に記して、誤解を生ぜざらしむる様に心掛くべし。此の類の書翰の長き

はやゝ忍ぶべし。然れどもこれまた簡潔にして趣致多く、情濃やかにして正確を失はず、韻致に乏しからぬ様に心を用ひてものすべし。以上の心がけをよそにして、千言萬語を列ぬとも、それは、ことば多きは品少なし。といふ弊に陥るべし。されど、一概に簡單にとのみ言はんも弊なきにあらず。例へば旅行先より父母の許に狀況などを報ずる文には、あながち簡單なるばかりを以て、よく其の體を得たるものなりとはせず。言ふまでもなく、簡單にして其の要を盡し得なば、これ最も好ましきものなれども、それは優れたる筆の力を有する人ならでは、なす能はざるところならん。さればかくの如き場合には、簡單といふよりもむしろ親切懇篤ならんことを

主として、場合によりては、我が日記の全部を記しておくも妨なし。かくの如き場合にあたりて長きを厭ふは、おろかなるわざなりと謂ふべきなり。

要するに書翰文の作法は、書翰を受取る人になりて見て一考すれば、如何なるものが然るべきか、忽に明白なるべし。已上手なりといはぬばかりに、生漢語・生古文を振廻して書ける書翰ほど見にくきはなし。(幸田露伴)

一一 孝子要吉

一目也、夜咄を一條お認め、作美濃玉大垣城主戸田宗正殿領分蒲生と申す

よ要吉と申す百姓去年四十七歳の要吉
やうす者お親と苗村の貧民より三十八
年以前に貧苦より迫り要吉が姉妹二人を
連斗河内國へ送り去る處の者へ娘一人
妹手切奉り申す一人は京都の織屋に
在りて申す其の母と美濃へ送り去る
近江乃木山に於て病死被り由を
の村お申す要吉十一歳より在所に居
し是より生れ出でし節要吉より申す

我等お來てはもと追善供養と一向學堂
 と作らし人より大分好意を受け金銀米
 穀を修程借り置き作て元返し申さず此
 乃ち未嘗とけ心懸りよもく其方成長
 致しはも何事縁哉申して右の借金を
 返しは秋は様よと申すが如何なる佛事
 よりも親之孝りし事とて借方の帳面
 一冊渡し置きて河内國へ歸り遂に死
 去致し由其の後右要吉十一歳より親

所遺言をおもひ所の寺へ丁稚奉公し出
 下多摩大寺に勤めし金三兩をたえ其
 乃金子を寺へ預け置て江戸へ歸り日傭
 取を致し又金三兩を儲り故郷へ歸り
 又ある金子に少くは田地買入ん
 ば致し更人々感心致し二介合力して六
 畝二町より田地一反を求め右の田地を
 作りながら所乃庄屋へ奉公し入り年暮
 二人前の金致して至り暮に入り十一

家より去年四十七歳まぐ錦入を引よ着
 多しこゝろたのく^花花と菘のよ^葉葉を着てふ
 せり去る暮とよ米百七十俵を三十兩を
 多兌ひて親乃借里並き申作米金と利息
 納はちて右百七十俵と三十兩と一錢
 も跡らば借金を返し由去年祝の年忌
 三十七系に親乃遣せけ通りを立て申は
 右の儀米世に殿承りひく感涙と及ぶ此
 鷹野の帰りの右要吉がひふをまき屋は立

あり申す直直金を賜り金二百足賜り
 り屋敷地を貢一石を永代除地と賜り
 由此の旨此乃通して大評判に成り
 右要吉生きたる親人の家行とま多類も
 有之能くせと十一歳とて別是小親の爲に
 右の通りは辛苦艱難ひしし四十七と申
 すまが晝夜をわたず親を忘れ申さば此
 の孝行ハ士君子も及ぶる事と云ふ

ち

おきわどめく
 流
 くくもよまをさうせもさほぐくひもせ
 どもつれ怒り泣きゆくのせ所せもぐくひ
 幾つありはあらくてゆりしき聞うせ下
 けりしゆりしき (紀 徳民)

一三 誠

或人司馬〔二〕温公に誠に入る方を問ひければ、妄語せざるより入る。といはれしとぞ。げに妄に語らず、虚言をいはぬより、誠の道には入るべきなれど、虚言をいはぬを直に誠といはず。

〔二〕 司馬光、宋の政事家、史家。(一) 七九一七四〇

誠は虚言をいはぬその真心の現れたるものなり。故に言に虚言せざるのみならず、行をも偽らず、欺かざるは、誠に入る近道なるべし。

〔三〕 周の春秋時代の人。

〔三〕 衛の賢大夫。

〔四〕 禮記なり。

昔、衛の靈公〔三〕、夜、夫人南子と共に坐し給ひけるに、遙かに車の轟く聲しけるが、闕下にして聲なく、闕下を過ぎて復鳴りけり。靈公、誰なるべきか。と南子に問ひ給ひければ、これは蘧伯玉なるべし。禮に、「下公門式路馬。」といふことあり。忠臣孝子は昭々の爲に節を信はず、冥々の爲に行を墮さず。蘧伯玉は衛の賢人なり。夜なればとて禮を廢せじ。といひけり。靈公人をして見しめ給ひけるに、果して伯玉にてありけり。人知るまじとて欺くは妄なり。四知〔五〕といひて、人知らずと思

〔五〕 後漢書に、楊震曰、天知神知子知我知、何謂無知。

へども、天知る、地知る、人知る、吾知る、いかでか蔽ひ隠すべき。たとへば一升の米、日々二三十粒は取るとも、置くとも知れざるべし。然れども久しうして、置く時はまし、取る時はへる。草木も、朝見し色も、暮に見し色も、昨日見しも、今日見しも、さして變らぬ様なれども、誠といふもの少しの閒斷なき故に、いつ太るともなけれども、次第に太るものなり。人の見ぬ閒とて、閒斷あらば、草木も思ふまゝには伸びもすまじ。深き谷の蘭も、遙かなる山の紅葉も、常によく薫り、うつくしく照ればこそあれ、人の至るを待ちて香を放ち、色を出さんとせば、閒にあふことあるべからず。常々心にかけて掃除したらん座席と、俄かに蜘蛛のいとり、柱ふきたらんとはいかで見ま

がふべき。人、平生をたしなまずして、その期に臨みて偽り文らんは、誠の俄か掃除なるべし。すべて人は欺くべからず、欺くはみづから我が心を欺くなり。

後撰集の歌、讀人しらず。

なき名ぞと人にはいひてありぬべし、

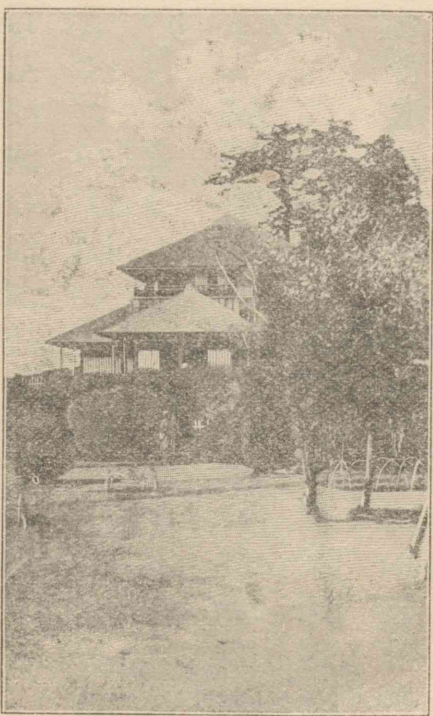
心とはいいかゝこたへむ。

と、古歌にいへるが如く、心に心を顧みて、欺ける我が心を咎めたらんには、ひとり居るとも額より汗出づべし。畠山重忠、鎌倉殿の不審を蒙りし時、偽なき旨を起請を以て申し上ぐべしとありければ、「われ一生偽をいひしことをし。この事に限りて起請をばかくまじ」とて、終に書かざりしこそ、勝れて

源頼朝の功臣。
(二八三—二八六)

いみじくきこゆなれ。(三浦晉「梅園叢書」に據る)

一三 農人形



常磐公園

水戸の常磐公園は日本三公園の一と稱せらる。その小高き丘陵に立つ時は、仙波沼を隔てて、^(三) 一帶の郊野を雙眸の中に收むることを得べし。園は徳川齊昭の創設せし所、名けて偕樂園といふ。蓋し民と偕に楽しむの義に

^(三) 水戸市の西方にあり、周回約一里二十丁。

^(三) 水戸侯第十一世烈公(西暦一五〇〇)

取れり。されば四時常に士民の來り遊ぶにまかせ、花晨月夕自由にその歡娛を竭さしめきといふ。こゝに素焼の人形を鬻ぐ。結髪の老農、笠をその前におきて積藁の側に坐せるものなり。製法極めて麤なりと雖も、頗る雅致に富めり。世人呼んで、之を「烈公の農人形」といふ。齊昭居常深く心を農事に用ひ、屢、園中の好文亭に登臨して、親しく稼穡の勞苦を察す。嘗て銅を以て農人形を鑄しめ、常にこれを座右に置けり。その食膳に向ふや、必ず先づ初穂の意を以て一箸の飯粒を之に供へ、然る後に食するを例と



農人形

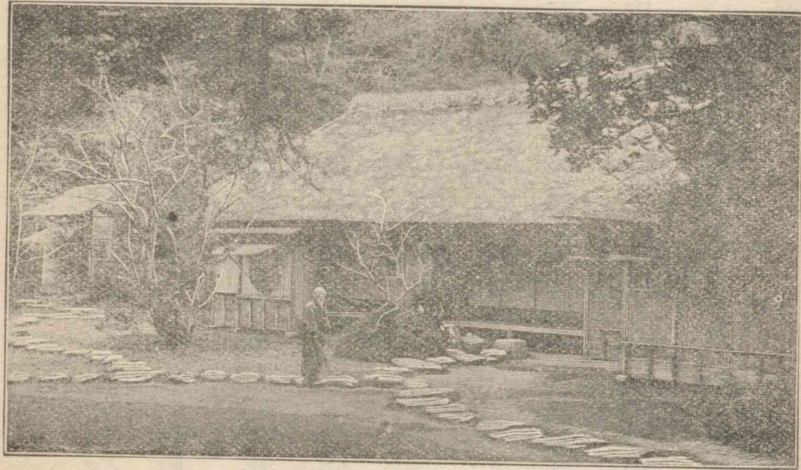
せり。或時齊昭は、

朝なく飯食ふごとに忘れじな、

恵まぬ民に恵まるゝ身を。

といふ一首の和歌を侍臣に與へて謂へらく、「古より賢君は民を見ることなほ慈母の赤子におけるが如し」といへり。されど余は百姓をばわが乳母なりと思ふ。余は百姓に向ひて何等の恵を施さゞれど、百姓は我が爲に命を繋ぐべきものを與ふ。其の恩は乳母と異なることなし」と。
爾來、侍臣等は此の農人形を呼びて御百姓といふに至れりとぞ。今鬻ぐところの農人形は、蓋しこれを摸造したるなり。古人の意を勸農に用ひしこと、まことに深しと謂ふべし。

(一) 水戸侯第二世、
義公。(三六八—三
六〇)
(二) 常陸國久慈郡太
田の西北二十
町。



山 西 莊

齊昭の祖先なる徳川光圀も亦、嘗て菟裘の地を太田の郷、西山といふところに擇びぬ。地は水戸を距ること北のかた數里にあり。
公は暇あるごとに、農民を茲に引見して、親しく農事を談ぜられきといふ。庵を西山莊と稱し、池を心字の池といふ。池を隔てて谷あり、山あり。春秋の觀賞、兩つながら好し。名づけて櫻が谷。

觀月山といふ。室は廣さ十數人を容るゝに過ぎず。殊に書院との間に、全く其の闕を撤したるは、貴賤の別を離れて、親しく農民と談話を交へんとする意に出でたりと聞く。齊昭の精神は、多く光圀より得來れり。その意を農事に用ふるも亦、前後相承けたりと謂ふべきなり。(田園都市)

一四 吾が輩は猫である

吾が輩は猫である。吾が輩は今夜こそ鼠を捕つてやらうと思つて、種々作戰計畫をめぐらして居たが、夜はまだ浅い、鼠はなか／＼出さうにない。大戰の前だから一休養を要する。勝手には引窓がない。座敷なら欄間と云ふやうな處を、幅一

尺程切抜いて、夏冬吹通しに引窓の代りにしてある。さつと吹込む風に驚いて目をさますと、月さへいつの間にさしてか、竈の影は斜に揚板の上にかゝる。寢過しはせぬかと、二三度耳を振つて、家内の様子を窺ふと、しんとして柱時計の音のみ聞える。もう鼠の出る時分だ。どこから出るだらう。戸棚の中でごと／＼と音がしだす。小皿の縁を足で抑へて、中をあらして居るらしい。こゝから出るわいと、穴の横へすくんで待つて居る。なか／＼出て來る氣色はない。皿の音はやがてやんだが、今度は井か何かにかゝつたらしい、重い音が時々ごと／＼とする。しかも戸を隔ててすぐ向側でやつて居る。吾が輩の鼻づらと、直径にしたら三寸も離れて居ら

ぬ。時々はちよろくと穴の口まで足音が近寄るが、また遠のいて顔を出さぬ。戸一枚向ふに現在敵が暴行を逞しくしてゐるのに、吾が輩はちつと穴の出口で待つて居らねばならぬ。随分氣の長い話だ。鼠は旅順碗の中で盛に舞踏會を催して居るらしい。せめて吾が輩の這入れるだけ、おさんが此の戸を開けて置けば好いのに。

今度はへつつい陰で、吾が輩の鮑貝がことりと鳴つた。敵は此の方面へも來たなと、そうつと忍足で近寄ると、手桶の閒から尻尾がちらと見えたり、流しの下へ隠れてしまつた。しばらくすると、風呂場でうがひ茶碗が金盥にかちりと當つた。今度は後方だと振りむく途端に、五寸近くある大き

な奴が、ひらりと齒磨の袋を落して、縁の下へ駈込んだ。逃すものかと續いて飛びおりたが、もう影も形も見えぬ。鼠を捕るのは思つたよりむづかしいものである。吾が輩は先天的に鼠を捕る能力がないのか知らぬ。

吾が輩が風呂場へ廻ると、敵は戸棚から駈けだし、戸棚を警戒すると、流しから飛びあがり、臺所の眞中に頑張つて居ると、三方面とも少々づゝ騒ぎ立てる。小癩と云はうか、卑怯と云はうか、到底彼等は君子の敵でない。吾が輩は、十五六回はあちらこちらと、氣をつからし、心をつからして奔走努力して見たが、遂に一度も成功しない。殘念ではあるが、かゝる小人を敵にしては、如何なる東郷大將も施すべき策がない。始

は勇氣もあり、敵愾心もあり、悲壯と云ふ崇高な美感さへあつたが、遂には面倒と馬鹿げて居るのと、眠いのと疲れたのとで、臺所の眞中へすわつたなり動かないことになつた。しかし動かないでも八方睨みをやつて居れば、敵は小人だから、大した事は出来ないのである。

目ざす敵と思つたものが存外つまらないと、戦争が名譽だと云ふ感じが消えて、にくいと云ふ念だけ残る。にくいと云ふ念を通り越すと、張合が抜けてぼうつとする。ぼうつとした跡は、勝手にせよ、どうせ氣の利いた事は出来ないのだから。と、輕蔑の極、眠たくなる。吾が輩は以上の徑路を辿つて、遂に眠たくなつた。吾が輩は眠つた。休養は敵前に在つても必

要である。(夏目漱石「我が輩は猫である」に據る)

一五 うれしさ

雨ふらんとする空のいと暗き夕、寒風に吹送られながら、長しき路を行盡して、やうやく吾が家の門を望み得るあたりまで歸りつきたる時、尾をふりくく狗の馳出で、悦び迎へたる、狗もまことに嬉しかるべく、主もまことにうれしかるべし。

憂しともおもひ、辛しともおもひながら、その事を爲しはてたる後、浴みしたる時の嬉しさ。

久しく讀まざりし書をひき出して、心ゆるやかに見る折か

ら、情深かりし人の文のはさまり居たるに眼とまりて、十年ほどのむかしを今に繰返し見たる嬉しさ。蟲のためにいたく衰へたる樹を、枝など截りつめて活かさんものと念じたるに、多く芽をふき出して勢よくなりたるを見たる嬉しさ。長き病のやうやく癒えたる時、縁端近くゐざり出で、久しく見ざりし庭の面を見、天の色を見たる嬉しさ。親しき友の子孫などの美しく賢う生ひ立ちゆくを見る嬉しさ。むくつけき人の、思のほか親にはいとやさしう仕ふるよし聞きたる嬉しさ。

我が言を用ひたる人の、そのため幸福多くなりたりと聞きたるうれしさ。みづから種子を下したる草の初花咲きたる嬉しさ。自ら克たんとはおもひながら、慾の抑へがたさに克つあたはで、歳月経たることを、一日遂に思ひきり得て、危き戦に勝ちたる心地したる嬉しさ。自ら箒を執りて清らかに庭掃きたる後、直に落葉の一ひら二ひら、落霜紅の一顆二顆落散りたるを見ては、流石に惱ましく思ふを免れざりしが、心をかへて觀れば、地に箒目のあるがため、葉の散れるも實の散れるも趣をなして、をかしても思ひなされける嬉しさ。

借りたる金を悉く返したる、なさて叶はぬことをなし果てたる、訪はで叶はぬ人を訪ひたる、讀みさしたる書を読みつくしたる、みな嬉し。

年も暮れたる大晦日の夜に、よろづの事をしはて、明日のまうけも整ひつなど思ひつ、取片づけたる居間の、常には様異なりたるが中に、身を清めて正しく坐りたる嬉しさ。一月一日、父母兄弟姉妹皆うち揃ひたる嬉しさ。

(幸田露伴—長語)

一六 風と露

一 風の音

草木が風を受けて、葉枝又は莖が動いて一種の音を發したり、又凧に木の葉が飛舞ふさまなどは面白く見える。

秋の野の芒の風に戦ぎ、河邊湖邊海邊などにて、菘蘆菰などが風を受けてざわ／＼音のする時などは、至つて寂しい感情が起る。

秋の夕方、晴渡つた空に一點の雲もなく、またさしたる空氣の動搖もないのに、森や林の梢で何となく音がして、秋風のわたるのを知らせることがある。かの松風・松籟など云ふのもこれと同じやうなもので、別段に強い風も吹かぬに、松の梢では一種の音がする。これはやがて空には多少の風のあつて示すのである。須磨・明石の海邊又は東海道五十三

次の松竝木などで、晴れた日の夕方又は月の亘えた夜に、高い梢の上で松風の音のするのは、自ら一種の趣がある。昔から松風の音が吟詠の材料に上つたのも、尤もであると思はれる。

枝垂柳の風に靡く様を見ると、微風では多くの枝がそよそよと一緒に動いて、風、新柳の髪を梳る。といふやうに優雅な趣がある。然るに暴風になると、恰も狂ひ騒ぐ鬼女の髪のやうに、東に舞ひ、西に舞ひ、南に、北に舞狂ふ。又一入の壯觀である。

竹藪の風を受ける工合も、多少これに似て居て、風に逆らはずに動く有様に趣味がある。歌人八田知紀はかやうに歌う

てゐる。

吹く風になびきく〜て争はぬ

こゝろや竹のみさをなるらむ。

二 露の玉

露は夏草に下りるもので、朝早く起きて叢の間を見ると、葉に綺麗に著いて居る。殊に稻・蘆などのやうな禾本科の植物、又ふきやぶがらしなどの葉の縁には、小さい水玉が規則正しくのつて居る。竹の葉の先にも、同じやうに綺麗な露の玉が見える。

斯様に稻や竹の葉の先端、又はふきやぶがらしなどの葉の縁に著く水玉は、空氣中の水分が凝集したのではなく、夜中、

氣舞風梳新柳
髪、水消波洗二舊
昔續、和漢朗詠
集

香川景樹の高
弟、(四九)二五三

植物體の中に澤山に溜つた水が、葉の縁又は先にある小さい孔から外へ濾しだされて出て來たのである。植物の中から出る水は、何時でも葉の中の極つた部分に著く。葉の全面に、銀色の小さい水玉が不規則に著いて居るのは、空氣中の水分から出來た眞の露である。

露に逢ふと、草が如何にも涼しさうに且つ新鮮に見える。熱帶の沙漠のある地方では、雨は降らぬが、朝露が夥しく下りるから、植物がそれで水分を取ることが出来る。すべて露は夏のさかり、晝間熱く、夜から明方にかけて、溫度の急に下る時に多く出来るので、日中の熱さで萎れかゝつた葉や莖も、再び生き返つたやうになる。露は朝な〜清新の美觀を夏

草に與ふるのみならず、斯様に植物の生存上にも大切な關係があるものである。(三好學「植物生態美觀」に據る)

一七 須磨の浦

攝津の海岸西に盡くる處を須磨の浦といふ。畿内と山陽道との咽喉にして、古須磨の關のありし地なり。此の地、畿内の偏隅なるを以て、貴人の謹慎・屏居の地たりきと見ゆ。相傳ふ、在原の行平卿勅勘を蒙りて久しく此の土に住せしとぞ。其の後、壽永の亂に、源平二家大いに此處に戦へり。されば須磨は僻地なるにも係はらず、關の址を以て名高く、貴人の舊蹟を以て名高し。しかのみならず、風光清絶にして、月色殊に佳

平城天皇の皇子
阿保親王の第二
子。
壽永三年(八四四)
二月の一の谷の
戦。

一の谷より西、國界に至るまで十餘町の間は、鐵拐鉢伏兩山の麓にして、山頂より路傍に至るまで、一面に松林相連なれり。即ち須磨御料地なり。御料地より眺むれば、前は蒼海渺茫として遙かに紀泉の山を繞らし、左は天井川の砂洲斗出して、粉壁樹林の中に點じ、右は淡路島呼ばゞ應へんとす。平遠明媚喜ぶべきに、



須磨の浦

* Panorama

後は御料林の老松山上に連なり、龍蟠り、虎踞る、眞にこれパノラマに入るが如し。況や明月中天にかゝり、海波銀を磨する時においてをや。須磨の須磨たるところは、たゞ此の十數町の間に在りといふべし。

須磨は風景の佳なるのみならず、醫家の説によれば、空氣の清潔にして、養生に宜しきこと亦天下第一たり。故に近來、此處に轉地保養する者日に多きを加ふ。これを以て旅店、別莊、青松、白砂の間に相望み、凡そ地の買ふべく、借るべきもの殆ど餘す處なく、十年前の漁村變じて雜踏の街とならんとせり。獨り一帶の御料林は、固より金力の侵すべきにあらず。民これを得ざるが如くにして、永くこれを失ふことなし。富人

も往き、貧生も遊ぶ。風景依稀として古の如くなるは、豈にこれ。我が帝室の餘光にあらずや。(新保一村)

一八 須磨の嵐

後の山つしの山嵐に鳴りわたる松の木かげより、萌黄匂の鎧を著、重籐の弓をたばさみて、駈出でたる一人の若武者あり。沖なる船をめぐけて、馬を海へさつと打入れ、一町ばかり泳がせたるをりしも、後の方より、一人の老武者大音あげて、「天晴好き大將軍と見奉る。敵に後を見せ給ふは卑怯に候。返させ給へ、返させ給へ。日本一の剛の者、熊谷次郎直實とは我がことにて候。」と、扇を上げてうち招く。彼の若武者は、呼ばれて馬

*源頼朝の臣、後出家して蓮生坊とよぶ。

の頭を立て直し、引返して汀に打上らんとするところに、彼の老武者駈寄せてむずと組む。組みたる儘にて、兩馬の間にどつと落ちたり。老武者の力やまさりけん、かの若武者を取つて抑へ、首をかゝんとて、兜を後におしあふのけて見れば、年の頃十六七の少年なり。老武者は驚きて、「如何なる御名ぞ、名乗り給へ、助けまゐらせん。」と言へば、若武者は「名乗らずとも、首を取つて人に問へ。見知らん者もあるべし。一旦敵に組みしかれ、何の面目ありて長らへん。早く首をうち取れ。」と答ふ。わが子も同じ年頃なり。あはれなる人かな。如何にもして助けばやと、老武者四邊を顧みれば、後の方ハカケトキカキリに、夥しき蹄の音して、はや身方の兵五十騎ばかり近づきたり。今はこれまで

あはれそ〜 みちいさきねと〜 ころもい〜
ち〜う〜た〜ひ〜の〜う〜つ〜に〜あ〜れ〜す〜鳥〜歌
ち〜う〜そ〜く〜も〜い〜ふ〜し〜あ〜そ〜あ〜り
な〜く〜。人〜の〜け〜う〜ふ〜し〜む〜宗武

二〇 比叡山の杜鵑

ほととぎす自由自在に聞く里は

酒屋へ三里豆腐屋へ二里。

と云ふ歌は、子供の時分に聞覚えたもので、杜鵑は中々聴く

機會の少ないものだと思つて居た。てつべんかけたか」と云ふ啼き聲だと云ふことも、早くから人に聞かされたが、本物を聞いたことは一度もないので、どうかして、是非聞いて見たいものだ、と豫てあこがれて居た。東京へ出てから、親戚の別荘が巢鴨に在つて、其處では、折々杜鵑が聞えると云ふので、三月ばかり、其の別荘に住まはせて貰つたこともあるが、ついぞ望を遂げたことはなかつた。其の後、萬葉集を讀んで見ると、北陸あたりでは、晝は終日、夜は徹宵、杜鵑が來啼きとよもすと云ふ歌の文句が、頻に目に附く。昔はそんなに杜鵑が多かつたものかしら、歌人の大袈裟な言廻しではあるまいかと、半信半疑で、國學專攻の一友人に尋ねたことがある。

其の答にも、實際はあまり居なかつたのだと云ふ説もあると聞いた。

京都へ来てからは、かしこゝに、杜鵑の名所があるやうに聞いた。嗟峨の小倉山邊では、晝でも杜鵑が啼いて居ると云ふ話だ。けれども未だ一度も行く機會が無かつた。所が四月半ばに、叡山へ上つた時、雲母越の途中から道連れになつた叡山通の話に、初夏の新緑の頃、既望後の月夜に、杜鵑を聴きながら上るのが、會心の極であると聞いて、宿願成就の時節到來と、心中に歡呼の聲を禁じ得なかつた。

そこで大正二年五月二十三日、陰曆十八日の夜、雲母越を四明が嶽に上ることゝ一決した。頂上に達する頃、夜の白々と

*Goethe.
獨逸の大詩人。

明ける景色が得も云はず美しいと聞いて居るから、午前一時半頃結束して、同行二人、犬を連れて出發した。月影は、穩かな仄白い光で、一帶の山野を覆ひ、坐ろにゲ^{*}イテの「月の歌」を偲ばせる。東山のふつくりした寢姿、叡山のどつしりした雄姿が、はつきりと眼に映じる。

一乗寺村を通ると、人家は盡く寢靜まつて、折々犬の遠吼を聞くのみであるが、かゝる田舎の茅屋にまで引かれた電燈の火影は、戸の隙間から外へ洩れて居る。愈、雲母阪に掛ると、左右から覆ひ被さつた木下闇に、鼻を撮まれても分らない。何遍か此の阪を往返したことのあるペスも、今夜ばかりは心細いと見えて、悲しさうな聲を出して、頻に足もとに纏は

る。晝間でも随分骨の折れる阪を、眞の闇に上るのであるから、折々石に躓いたり、雨落ちの窪みへ滑り込んだりしながら進むと、遙か上の方で何やら聞えた様な氣がする。杜鵑ぢやないかと、立止つて、耳を立てる。後が續かないので見當が附かぬ。或は一町も先の方に進んでゐるベスの啼き聲かとも思はれた。

音羽瀧の聞える平坦な隘路に出ると、再び月光に浴する身となつた。一町も行かぬ中、復しても阪路にさし掛る。夜陰の有難さには、露の深いだけ餘程涼しいので、喘ぎ／＼登つても、汗は左程に出ぬ。二十分も経つたかと思ふ頃、愈、杜鵑の聲が聞えだした。これが臍の緒切つて始めて聞いたのである。

から、一所懸命に耳を澄す。成程、てつべんかけたか」と聞える。餘程佳い聲だ。前に記した叡山通が、遠州の山奥で見たと云つて、二羽の杜鵑が樹の枝に留つて居ると、下の枝に、鶯が二羽留つてゐて、さも感心した様に、杜鵑の啼き聲を傾聽して居た。云は、杜鵑は鶯の先生である。」と云ふ様な話を聞かせた。あの聲なら、鶯の先生と云はれても恥かしくないと思つた。(藤代禎輔—文藝と人生)

二 梅雨の後

五月雨霽れたり。日影まちえし草葉の色、梢の色、植揃へたる早苗の色、何物か嬉しからざらん。笑顔ぬれたる百合の花に

は、白き蝶來りて、落梅の如くひらりくと飛ぶ。

昔笠被りたる女の二三人並び居るは、あまれる水に流れんとする苗の根などさしとむるにやあらん。今二三日も待ちなんには、此の日和にも逢ふべかりしを、袂も裾もしとにぬらして田植しつらんことよ。藁屋の軒には蓑笠ほしかけたるも見ゆ。麥やらん、米やらん、筵に入れたるをひろげ居るなど、まことに畫のごとし。

玉蜀黍の地を離るゝこと四五寸、莖を薄紅にしてそよ吹く風にゆるるゝも涼しげなり。これを境にしたる彼方の畑には、瑠璃の玉を見せたる茄子あり。勢よく此方に生ひ立ちたるは唐辛子なるべし。秋風の身にしむ夕、もゆるが如き紅の色を見るべきも思ひやらる。水のおもては波靜かにして、魚も躍らず、鳥も浮ばず。たけたかき少女の心地して、友待顔に咲出でたるは杜若なり。影を倒にせる柘榴の花、火よりも赤し。

日はやうく天に沖して、炎光人閒を焼かんとす。蟬の聲松の上に聞えて、きのふの夕の靜かなるに似ず。午後に至らば雨を戀ふる人もあるべし。雨もとよりにくからず。されど晴れたる日の心地よさ、又いふべくもあらず。名殘の露水晶の如く、日の光黄金に似たり。天和田建樹

三三 草とり

六・七・八・九の月は、農家は草と合戦するのである。天は一切のものを生じ、一切の強いものを育てる。打ちやつて置けば、比較的脆弱な五穀蔬菜は、野草に埋没せられてしまふ。二宮尊徳の所謂「天道すべての物を生ず、制裁補導は人間の道」で、ここに人間と草との戦鬪が開かれるのである。

老人・子供、大抵の病人はもとより、手のあるものは十能でも使ひたい程、畑の草取、田の草取に忙殺せられる。草に攻められます。と、よく農家の人達がいふ。草を退治するのではなくて、全く人間が草に攻められるのである。

唯二段かそこらに過ぎぬ畑をもつて、百姓の眞似事をしてゐる自分でも、夏・秋は烈しく草に攻められる。起きぬけに、顔

も洗はず、露蹴ちらして草を取る、日の傾いた夕陰に取る、取りきれないで日中にも取る。やつと綺麗になつたかと思ふと、最早一方では生えてゐる。草と蟲とさへなかつたら、田園の夏は本當に好いのだが。と、いつも愚痴をこぼしてゐる。全體、草などいふ餘計なものが何の爲にあるのか、われは何故草取器械にならねばならぬか。草取は愚だ。打ちやつて草と作物との競争をさせて、全滅とも行くまいから、残つただけを此方に貰へば済む。かう思うても、實際眼の前に草の跋扈するを見れば、取らずには居られぬ。隣の畑が綺麗なのを見れば、此方の畑を草にして、草の種を鄰に飛しても済まぬ。近所の思はくや迷惑も思はねばならぬ。

*孟子の語。

そこで又勇氣をふり起して草をとる。一本又一本、一本取れば一本減るのだ。草の種は限なくとも、取つただけは草が減るのだ。手には畑の草を取りつゝ、心には心田の草を取る。心も畑と同様で、とにかく草が生え易い。油斷をすれば、畑は草だらけである、吾等の心も草だらけである。否々、四圍の社會も動もすれば草だらけにならうとしてゐる。吾等は世界の草の種をとり盡すことは出来ぬ。しかし打ちやつて置けば、吾等は草の中に埋没せられてしまふ。吾等は人の爲に草を取るのではない、己の爲に草を取るのだ。草の爲に草を取らず、性命の爲に草を取るのだ。敵國^{*}外患なければ、國恆に亡ぶ。で、草がなければ農家は墮落してしまふ。わが内外の草を取

らなければ、吾等は終に平和の内に腐つてしまふ。

(徳富蘆花「蚯蚓のたは言に據る」)

二三 歐洲大戰の起因

- (一) Austria-Hungary.
- (二) Bosnia.
- (三) Sarajevo.
- (四) Ferdinand.

(五) Servia.

奧地利匈牙利帝國の新領土^{ボスニヤ州}の首府^{サラエヴォ}に於て、西曆一九一四年即ち我が大正三年六月二十八日の朝、同國皇太子^{フェルデナンド}並に同妃があへなく刺客の短銃に斃れてより、一波動いて萬波沸き、忽にして世界未曾有大戰爭を惹起すことになつた。

此の暗殺が大戰爭の起因となつたのは、其の暗殺の陰謀が鄰邦塞耳比亞王國の參謀本部に於て、祕密の間に計畫せら

(一) Belgrad.

が要求の要點を拒絶した。是に於て塞國駐在の奥匈國公使は七月二十五日を以て首府ベルグラドを引揚げ、續いて同二十七日奥匈國は塞國に對して宣戰を布告し、同日より兩國軍の一部は既に砲火の交換を始めたのである。

茲にまた塞國の背後には同一スラブ人種の露西亞帝國があつて、常に塞國を助けて居たのである。殊に往年日露戰爭の結果、露國軍備の弛んだのに乘じて、獨奥兩國は露國に對して傍若無人の動作をしたが、露國の上下は齒を嚙みしめて、ぢつと耐へ忍び、専ら國力軍備の恢復を圖つたのであつた。然るに最早戰鬥力も十分に出來たので、露國は奥匈國に對して、塞國に對する要求の寛和を望み、もし聽かれぬ場合

(二) Slav.

には武力に訴へることを辭せぬといふので、七月二十四日の夜に御前會議を開き、翌日、歐露の全陸軍に大動員令を下した。同二十八日の樞密會議には露國皇帝も親臨あつて、吾人は既に隱忍すること七年有半に及べり。と切言して、決心の程を示された。

されば奥匈國の力で塞國を攻めれば、忽にして撃滅することは出來るが、露西亞が塞耳比亞を助けるとあつては、實に容易ならぬ大事である。是に於て、今までは陰にかくれて奥匈國を操縦して居た獨逸皇帝は表面に現れ出で、露國に對して動員の中止を要求し、もし聽かれざれば、獨逸も亦兵力を以て同盟國たる奥匈國を助けるといふ最後の通牒を送

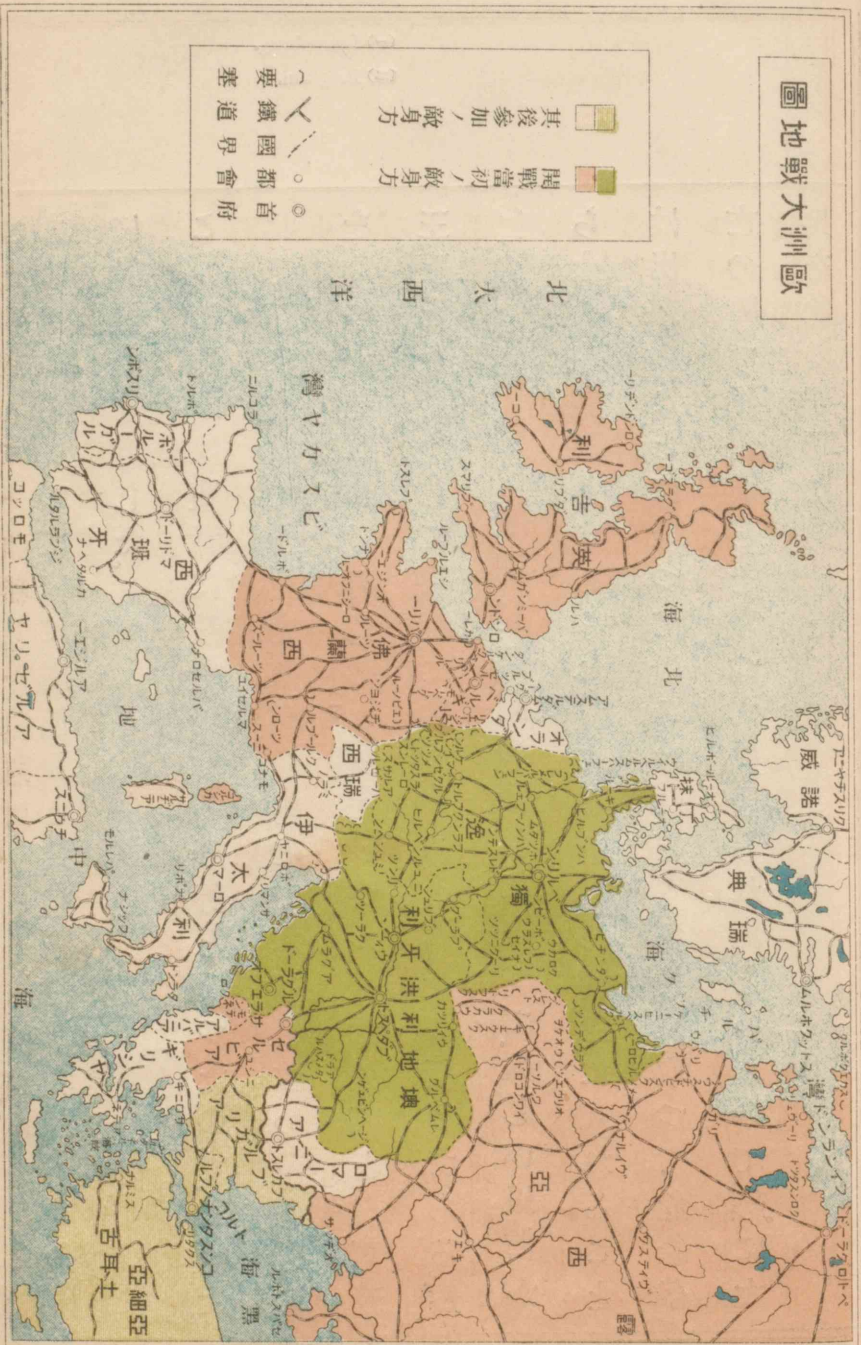
つた。戦備のほゞ整頓した露國は一向これに威嚇されず、期限に至つても敢て一言の答を送らない。かねてかくと期して居た獨逸は、前日來祕密の間に動員をして居たので、電光石火の如くに兵を露國の境に進め、八月一日には早くも兩軍巡羅兵の衝突を見るに至り、同日を以て兩國は互に宣戦の布告をした。

獨逸が奥匈國と同盟國であると同じく、露西亞と佛蘭西ともまた同盟國である。殊に佛國は一八七〇年及び七一年の戰に獨逸の爲に敗られて、二十億圓の償金とアルサス・ローレーンの二州を割讓させられたので、國民の遺恨は骨髓に徹し、機會もあらば報復しようとして、上下一同、日夜渴望して居

(一) Alsace.
(二) Lorraine.

圖地戰大州歐

○ 首府
● 國界
▲ 鐵道
□ 其後參加ノ敵身方
■ 開戰當初ノ敵身方



2021 F-2

(-) Luxemburg.

(二) Bergium.

たのである。よつて直に露西亞と共に獨逸と戦ふべく全國に動員令を發した。

こゝに獨逸は腹背に敵を受ける形勢となつたので、先づ大兵を西に向けて佛軍を擊破し、轉じて露軍を攻めるの方策を取つた。それには西鄰のルクセンブルグ太公國と白耳義王國とを通過して佛國に侵入するのが最も便利である。然るに此の兩國は、歐洲列國間の條約によつて、久しい以前から永久中立國と定められ、濫に兵を其の國內に入れることは出來ぬことになつて居る。けれども獨逸に取つて危急存亡の時、條約などを守つては居られぬといふので、終に大兵を此の兩國に向けた。

ルクセンブルグは日本の一郡程の小邦で、到底獨逸軍に抵抗することは出來ぬが、白耳義は小國ながらも相當の軍備を有し、上下擧つて勇敢な國民である。この不法極まる獨逸軍の侵入に對し、今や奮然として蹶起したので、激戦は早くも此處に起つた。獨逸は圖らず白耳義をも敵として戦ふことになつたのである。波瀾は益々大きくなつた。

英吉利はこれまで局外に立つて、關係列國の爲に調停の勞を執つて居たが、本來は佛露二國と協商して、緩急相救ふの約束が締結せられて居て、愈々破裂といふ場合には、佛露と行動を共にすべき事になつて居た。且つ獨逸とは永年海上の權力を競争して、互に機會があらば他を斃して國利國權を

(一) Montenegro.

増大しようとして計畫して居た。加之英國は白耳義の背後に立つて、これ迄同國の中立を維持して來たのである。然るに今、獨逸軍が其の國へ雪崩れ込んで、英國たるもの何とて傍觀して居よう。終に八月五日を以て獨逸に對して戰を宣し、同時に獨英二國の海戰は北海に始まつたのである。當時歐洲の列強中、中立を宣言したのは伊太利のみで、一方には獨・奧二國が連合して八方に當り、他方には露・佛・英の三國、白塞二國、塞の鄰邦、モンテネグロまで起つてスラブ族の塞國に加はり、獨・奧二國に宣戰の布告をするに至つた。全歐は眞に蜂の巢を突壞したるが如き大動亂となり、其の餘波は極東にまで及んで、英國と攻守同盟を約せる我が大日本

(二) Rumania.

帝國も、また兵を發して青島を攻略することになつたのである。有史以來の大戦は、實に端をかくの如き事に發し、今や伊太利、ルーマニヤさへ戰鬪に加はつて、硝煙は實に全歐土を蔽つて居るのである。(歐洲戰爭實記に據る)

二四 赤道附近の晝夜

赤道附近に在りては晝夜全く平分し、午前六時に日出を見、午後六時に日没を見る。其の分界甚だ正確なり。日出前十五分の頃には暗黒なる夜色既に消去りて、間もなく日光の赫くを見る。又日没後十五分時を過ぐれば、暮色蒼然として到

り、燈火に依らざれば文字を讀むこと能はず。三十分後には全く眞暗となりて、空には星光の燦爛たるを望むべし。故に是等の地方に於ては、彼の溫帶地方に普通なる爽曉及び薄暮の光景を認むること能はざるなり。余に、九月下旬瓜哇南緯五度の地に於て記せる日誌あり。今それに據つて赤道附近の晝夜の光景を示さん。

Java.
馬來群島中の
*一大島。

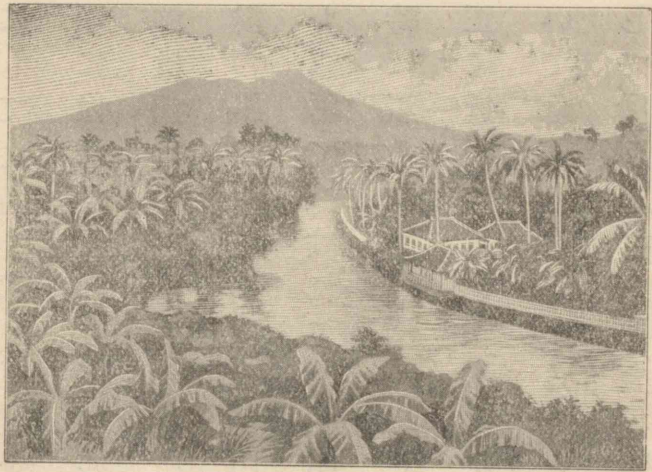
朝五時半まだ薄暗し。室内に於ては、燈火なくしては全く物を辨ずる能はず。是より急に明るくなりて、六時十五分前には最早燈火の要なし。六時には日光既に照りて眞青に晴渡り、片雲をも見るることなし。寒暖計は攝氏二十三度を示す。七時乃至八時までには最も爽快なる時刻なり。草木は多く露

を宿し、空氣は冷かにして澄む。山林の景色最も分明なり。既にして九時を過ぐれば、暑氣漸く加はりて、日光亦強し。十時頃には流汗淋漓として歩行に堪へず。正午前後に至れば、氣溫は攝氏の二十八九度に昇り、晴渡れる空には俄かに白き雲の峯起りて、高山の半腹以上は雲の中に入る。遠方の村々も靄雲に掩はれて所在明かならず。斯くて二時若しくは三時に至るや、層雲漸く増して、滿天次第に暗黒となり、雷雨の正に近づけるを報ず。忽にして電光一閃、迅雷鳴りひゞき、次いで急雨の直下すること恰も盆を覆すが如し。其の烈しくして、屋瓦を打ち、厚き樹葉に中りて發する聲の喧しさは、溫帶地方の雷雨の比にあらず。凡そ二三時間降續きて、日没前

に至れば、雨止み、雲散じて、復夕陽を見るを常とす。雨後は一

天拭へるが如くにして、身心頗る爽快なり。最も散歩に適す。されども亦往々にして、夜に入るも雨をほ止まず、殆ど終夜雷鳴を聞くことあり。

熱帯の樹林には蟬類甚だ多く、日出後より日没頃まで鳴く聲絶えず。たゞ驟雨の間のみ僅かにこれを聞かざるなり。夜に入りては又、遠近の蛙聲殆ど耳を聳す。殊に大雨の後に甚し。蛙



瓜 蛙 の 山 水

中には、其の聲音の甚だ太くして、恰も牛の鳴くに似たるものあり。又蟋蟀及び種々の鳴蟲は草間・樹蔭にありて、各固有の音を發し、又守宮に類する月幸は、夜色の近づくと共に、廊下の壁、廂裏等に出で、奇異の聲を弄す。これらの鳴く音遠近相混じて、恰も不調和の音樂を聽くに似たり。更漸く閑なるに及べば、凡百の樂手は皆其の聲を收め、遂には寂寞たる熱帯の夜景を現出するに至る。(三好學「熱帯植物奇觀」に據る)

二五 馬琴日記鈔

一、この節大暑凌ぎかね、著述暫く休暇。讀書消日す。(文政九年六月十八日)
勝美曰く、翁が讀書癖の尋常ならぬこと、この條以下の記

瀟澤解、曲亭馬琴と號す。(三四二頁)

黒板文學博士。

人皆苦炎熱、我愛夏日長。(唐文宗)

事これを證す。古人が「我愛夏日長」といひけんことも思ひ出されて、ゆかしき極みなり。

一、今日大暑に付き休業。終日讀書消日。今夕五時就寢。(天保二十年六月二十日)

一、八犬傳九輯三十五の分、百六十一回の内、一丁半稿之。大暑に堪へず、晝後より休筆。(同十年六月三日)

勝美曰く、老齡衰眼を以て暑中なほ筆を休めず、しかも慘澹たる經營の間に筆を行る、一丁又一丁、遂によく浩瀚なる八犬傳を卒ふ。翁にあらずんば、誰かかの長篇大作を成すことを得ん。

一、八犬傳九輯三十五の口、版下寫本、誤寫六七箇處、予書きなほし、お路に張入れさせ拵へおく。晝飯後より避暑午睡一時

馬琴の子宗伯の妻。

天保四年右眼失明、同九年春より左眼亦漸く見えず。

芳賀文學博士。

天保十年(一四九九)七十三歳、没年より九年以前。

櫻庭與三郎氏。文政七年神田同朋町なる宗伯の家に移る。



瀧澤馬琴

方浴し、今夕五時半より就枕。(同七月十七日)

矢一日く、讀書と半日の休筆と一時半の午睡とは、實に翁の避暑法なり。老年なほ斯くの如し、その勤勉驚くべからずや。今の青年子女、少しくこれに鑑みて可なり。

篁村曰く、翁が住居飯田町中阪も、神田同朋町も、共に矮屋

陋居といふにはあらねど、決して廣々したるところにあらず。そこにありて、一日机邊を離れず、大暑の砌はいかに暑熱の厭はしかりけん。僅かに半日の休筆と一時の午睡、これを以て避暑とせらる。今の弱蟲どもは愧ぢて死すべきなり。翁は早起早寢にて、朝は六つ時、夜は五つ時、又は四つ時、これが定規にてありしとぞ。

一、山本宗洪殿過日携へ來て見せられ候五經昔物語五卷全一册、一向の俗書見るに足らず候間、今日清右衛門歸路、山本殿へ差出し、請取書とり候義申付け、あて板入れ、袱紗に包み、手簡相添へ、清右衛門に渡し畢んぬ。(同五年六月四日)
一、爲永春水作、大學笑句といふものをお路に讀ませ聽き候

馬琴の聲、飯田町住。

人情本作者。(四四四一頁)

處、經書を遊び、聞くに堪へざるものなれば捨去る。(同十五年五月六日)

矢一曰く、馬琴が當時の戲作者等と伍せず、獨り自ら高うせし見識を見るべし。

篁村曰く、一室に閉居して世俗と絶ち、先賢古哲を友として、翁が讀書三昧に入られしは云ふまでもなし。儉約して唐の、大和の珍書を購ひ、得難きものは友人に借りて、殆どあらん限の書を見盡さんと心掛けられたるなり。山陽の日本外史未だ版にならざりし時、一本を寫し得て、その勤王論我が意に愜へりと悦ばれたるにても、その一端を知るべし。

春水の作を讀ませて聽き、聞くに堪へずとせられしは、春

(一) 合卷作者。(二) 三四三
滑稽本作者。(三) 三四八
滑稽本作者。(四) 三四九
三四九

水を憎まれしこと強き上、春水また翁の作を自儘に再版したる等の無禮あれば、一しほなりしなるべし。しかも卑人の俗書をもなほ讀ませて聽かれしにて、翁の讀書癖のいかばかりなりしかを察すべし。翁當時の戲作者と伍をなすを厭はれしは勿論にて、中に幾分敬愛の念ありしは柳亭種彦のみ。三馬は敗家の賊となし、一九は論ずるに足らずとせられたり。(馬琴日記鈔)

二六 時間

(四) Napoleon. (1769-1821)

ナポレオンは最も善く時間の大切なるを知れる人なり。其の比類なき大功を奏したるも、多くは時間の使用其の妙を

(四) Gronchy. (1766-1847) (二) Waterloo. (三) 1815.

極めしが爲なり。嘗て奥太利軍の敗北を嗤つて曰く、彼等は五分時間の價幾何なるかを知らざるが爲に敗れたるなり。と。此の時間の英雄ナポレオンも、ウォータールーの大戦に於て、自ら時を誤りたると、部將グルーシーの遅参したるによりて、一敗地に塗れ了んぬ。

「思ひ起つ日が吉日。」とは、成功の秘訣を教へたる名言なり。思ひ立つや否や、直に其の事に取りかゝれば、興味湧くが如く、我が身の勤勞に服し居るを忘れて、たゞ快樂を取り居るを覺ゆるのみ。従つて事業の進歩も自ら速かなり。若し思ひ立つ日に始めざらんか、當時の興味は索然として消失し、他日これを始むるに、非常の困難と痛苦とを感ずるのみならず、

(一) Heraclitus.
(B.C.535?-475?)

ギリシヤの
哲學者。

(二) Walter Lowrie.
(1784-1868)

米國の政治
家。

成功の一段に至りても、即時に著手したる所に劣ることを免れず。故にある大商店の如きは、規則を設けて、郵書は即日返答すべし。と定めたりといふ。事をなすは種子を蒔くが如し。一度季節を失ひては終にこれを蒔くを得ざるなり。ヘラクリトス曰く、汝は同じ河水を以て再び沐浴することを得ず。と。蓋し河水は流れて息まず、時は往いて還らず、大事も興味も、元氣も、熱心も、一度去りては復得べからざるをいふなり。ウォルターローリは、僅少の時間を以て多くの事を成したる人なり。其の術を問へば、即ち曰く、何事にても、爲さねばならぬことは直にこれを爲すにあり。と。嗚呼これ語淺くして意深きものにあらずや。世の失敗者を見よ、多くはこれ

明日ありと思ふ
心にあだ櫻、よ
はに嵐の吹かぬ
ものかは、親鸞
聖人。

明日ありと思ふ心のあだ櫻、夜半の嵐に吹拂はれて、茫然自失せる者にあらざるはなし。鐵は熱せられてなほ紅きうちに打つべし。枯草は太陽の輝き居る間に乾かすべし。事は時機を失はずして始むべし。古來、大人と呼ばれ、豪傑と稱せられし人は、大抵皆寸陰を惜しみて、機會を捉へし人なり。時を誤るものは責任を誤るものなり。斷じて世間の信用を受くることなし。ウォシントンの書記一日遅刻せり。辯疏するに己が時計の遅れ居りしを以てす。ウォシントン直に告げて曰く、汝は正確なる時計を買ふべし。さなくんば予は他の書記を備ふべきのみ。と。フランクリン常に遅刻がちなる奴僕を笑ひて曰く、善く辯解する人は何の役にも立たぬ人

(-) Nelson.
(1758-1805)

なり。」と。

ネルソン或時軍艦に乗らんとす。其の前夜御者來りて、明朝正六時に馬車を廻すべし。」といふや、かれは曰く、「それより十五分前に來るべし。一定の時より十五分前にあるは予が予たる所以なり。」と。ナポレオン一夕諸將を晚餐に招く。期に及んで諸將猶來らざりければ、かれは一人にて其の食事を始めたり。方に食卓を離れんとする頃、諸將の漸く來れるを見て曰く、「諸君、既に食事の時間は過ぎたり。請ふ、各自の職務に服せん。」と。

凡そ時間を大切に守るは勤勉の習慣を生じ、責任を盡し、義務を重んずる所以にして、實に身を立つる基なり。

(立身策に據る)

二七 天龍川

みすゞかる信濃路いで、

參河の岸うち洗ひ、

遠江に走り流るゝ

天龍は國のはや川。

眞下りに船さしくれば、

まへに見し千尋の岩は、

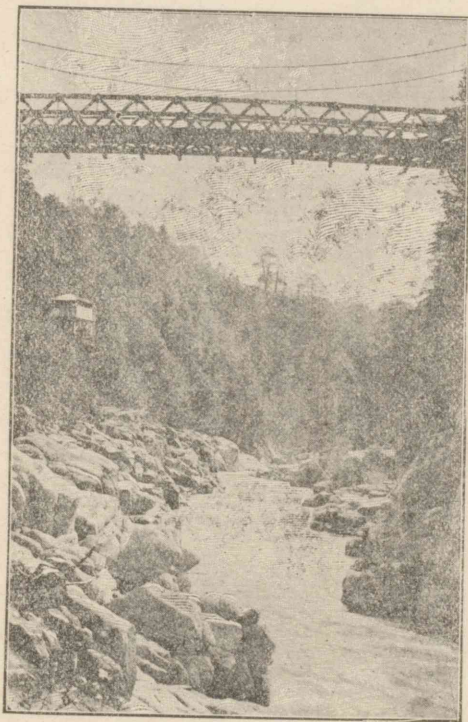
見るがうちに舳掠めて、

忽にあとにさかりぬ。

さかさまに走りゆく山、

立ちながら躍りゆく松、

しばらくも船は止らず、



天龍峽

時のまも岸はやすまず。

あはれこの岩きる水に、

舟の道、誰つけそめて、

陸ゆかば三日ゆく路を、

一日には下し初めけむ。

川上の諏訪の湖、

川下の遠江灘、

よそならで、呼ばゞ答へむ。

艦にへさきに。(天和田建樹—深山櫻)

二八 風俗の變遷

つくづく百年このかたの風俗を思ひくらぶるに、餘處の事をばおきて、江戸の人の風俗こそ昔には變りたれ。わが親し

紀元二二五六―
二二七四。
紀元二二七五―
二二八三。

きもの、中に、慶長・元和の頃生れたるもの、男にもあるが、それらの人々のはなしを聞くに、男は、冬、章のうちかけ、章の袴を美服とし、女は、紫の章の襪子をはくをよきけはひとせりといふ。その襪子は、わが幼き時までも残りてありしなり。婦女の帯は、金欄を美麗の限とし、黒地に、梅・櫻・松などをところよく織りつけて、これを、鉢の木の帯と名づけて珍重しけり。廣さ鯨尺二寸ばかりの紙を心として、綿などいることなし。四月より八月まで、婦女の禮服に、錦にて、廣さ鯨尺の八分ばかりなるを、うしろに結びて垂るゝを附帶ついでといふ。今の附帶は、昔の常の帯よりも廣し。今の人に昔の事を語れば、そらごとゝ思ひてつゆ眞とせず。これらは我がまのあたり

見たりしことにて、つくり事にあらず。ふるき事知りたる人あらば尋ね問ふべし。

紀元二三四四―
二三四七。

紀元二三四八―
二三六三。

すべて男女の衣服、昔は極めて質素なりき。男子も女子も、十四五歳までは、長き袖を著くるに、丈は鯨尺にて一尺七八寸を極とせしに、貞享の頃より二尺ばかりになり、それよりやうく長くなりて、近き頃は二尺四五寸になりぬと見ゆ。婦女の帯も貞享・元祿の頃より、漸く廣くなりて、今は鯨尺にて八九寸に及べり。綿を心として袴の如くす。男の肩衣といふは、昔は麻の幅、鯨尺の八寸ばかりなりしに、貞享・元祿の頃より幅一尺に及べり。寛永の頃までは、婦女は細き麻繩にて髪を束ねて、その上を黒き絹にて巻きしに、その後麻繩をやめ

紀元二二八四―
二三〇三。

て紙にし、越前國より、元結紙といふ物を造り出してより、海

内の婦女皆これを用ふ。それより、

絹にて巻く事もやみぬと、我が父

まさしくこれを見て語りきかせ

つ。今の人聞きては眞とせず。

およそ男女の髪形、我等が見およ

びてよりこのかたも、幾かはりか

しつらむ。今は昔の形も残らず。昔

の婦人は、髪多く長きを、たけにあ

まるなどいひてほめたりしに、近

き頃は、髪は、すくなく短きをよしとする風俗になりて、髪多



元 録 時 代 の 風 俗

き女は、髪の内を或は切り、或は剃りてすくなくす、この風俗は、京の婦女より移り來れり。この事に限らず、すべて男女の風俗、詞づかひ、物の名まで、近き頃は京に似たること多し。京は公家の外、工匠・商賈のみなれば、人の心柔和にて、利にさといふ、江戸は武家の都なれば、あづまうどの心粗暴にて、利にうとし。然るに三十年このかたは、江戸の人京の風俗を學ぶゆゑ、武士の心も昔に變れり。唯京の婦女の昔よりかづきするのみこそ、いまだ江戸に移らね。江戸の婦女の外に出づるに、昔はきまゝとて、黒き絹にて頭面を包み、目ばかりをあらはしけるが、その後綿にて頭面を包みしは、わが二十あまり、寛永の頃までしかなりき。今はちひさき綿を頭上にいたゞき

たるのみにて、面をば打ちさらし、はれやかなる顔にて道を行くさま、おもはゆげにも見えず。男は面をあらはすべきものなるに、この頃は編笠の肩の上までかゝるをかぶるは珍しからず。冑の如くなる帽子をかぶりて、面をかくすもあり。常の頭巾に覆面の如くなる物をつゞりつけて、目ばかりをあらはして道を行くもあり。そのさま昔の女のごとし。人目を忍ぶ者の多くなりたるにや。又この頃の男は小袖の裏を紅にし、或は紅のはだぎぬを袖口長にして、腕をまとふばかりにひらめかす者多く見ゆ。女はかへりて縹の白き裏などを著るなり。これらは男女所を易へたりといふべし。

(太宰春臺一獨語)

二九 麥藁帽子の傳

麥藁帽子はいづこの産ならんか詳かならず。すぐれたるふしは無けれど、虚心にして眞率なるが故に、老いたるも若きも親しまぬものなし。

その遠祖は保食神ホクシノカミより出で、由あるものゝ末なれど、中頃大いに衰へたりしに、白河院の御時、某といふ者、祇園の社の下司の僧につきて、神事に仕へ奉り、心はまめながら、貌のいとおそろしげなりければ、平忠盛大雨なる夜に行逢ひて、鬼ならんと思ひひがめて捕へたれど、院は供神怠りなき者の由聞しめして、却て御感をたまひぬ。これより麥藁氏の名始

*豊字氣神をいふ。火産靈神の御子にて、五穀を始め種々の物を産み出で給ひし大神。

めて顯る。

その裔某、元弘の亂に楠公に従ひて義兵を擧げ、赤阪城を守りぬ。北條が將、名越越前守攻むること急にして、城危かりければ、一族どもをかたらひ、甲冑かひとしくよろひ、打物とりて、夜中ばかり竊かに城外に出で、疑兵をはりしかば、越前が手の者、皆恐れて近づく者なかりき。その武略も思ひやらる。かくて南風競はず、武家再び榮ゆる世となりし後は、世を憤り、山野にかくれて出でず。徳川將軍繁盛の頃、武藏の國大森の里に住めるもの、僅かに技藝を以て知られたるのみなりき。維新の後、南朝勤王の士、多く顯位追褒を蒙りしによりて、麥藁氏も再び民間より擧げられ、帽子の爵たまはりて、

人の頭にたつ身とはなりぬ。されどこれをもて誇らんともせず、招くものあれば、貴賤・貧富を論ぜず喜びて往く。最も書生を愛してこれと親しみ、毎に曰ふ、少年は國家の元氣なり、これを庇陰するは余の任なり。と。出で、行くには必ず伴はる。破れたる衣裝と並びて恥かしとも思はず。

己とも舊交あり。或日その居を訪ひしに、卒然として語りて曰く、凡そ國家は儉に興り奢に亡ぶといふなるに、この二三年のほど、世の中次第に華奢に流るゝこそ歎かはしけれ。余が年頃思ひたのみたりし少年書生輩までも、もとの短衣敝袴をすて、モーニングコートとなし、高足駄は佛蘭西革の靴とかはり、手には絹製のハンカチーフを握りて、口にはシ

- (一) Morning-coat.
(二) Handkerchief.
(三) Cigarette.

* Panama.

ガレットを啣む。身のまはり華やかにのみなり行くにつけては、おのれをも疎ましきものになして、舶來の^{*}パナマを喜べり。華奢は文明に伴ふ習とはいへ、かくのみ進み行かんに、國家經濟の前途今更に思ひやらるゝよ。」と、頻に慷慨せり。老いて尙盛なりと云ふべし。

後又訪ふに、秋風立ちし頃出で、行きし所を知らずといふ。蓋し時を憤りて跡を韜ましゝならん。或人のいへる「屑屋の市に隠る。」と、孰れか信なるを知らず。(萩野由之)

三〇 旅にある友へ

軒ばに山あり、垣根に川ある御旅宿の、しかも主は且那

様の御弟子にさへいらせらるゝ由、うき旅などは御かごとにて、羨みねとぞ聞え候。さもあれ夕の雲に日の照りて、松風あはれに音づるゝ時、都の空思しめし出でらるゝは、實にゝと思ひやり聞えさせ候。

都は昨日も今日も雨淋しく、何時も御入の時めで給ひし鄰家の琴の音、あればかりを慰めにして過し申候。

御出立の後まだ僅かに候へども、此の程に變りし事は、私宿への曲り角に、舟板塀をかしく、瀬戸ものゝ表札かけたる女名前の家のありし、あれは御前様御同藩の何がしとやらが控家と御仰に候ひしが、五日程前の夜、物置に火を放ちしもの候うて、悉く焼失せ申候。ゆき來に

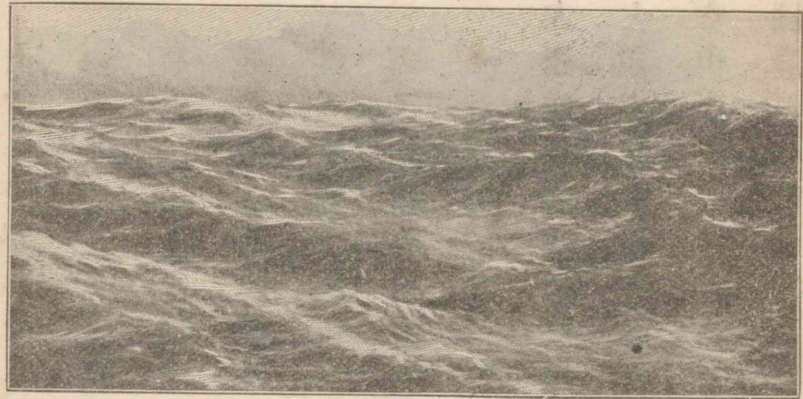
見あげて懐かしと思ひし一もと松思はぬ煙に成り候
うて、残念この事に候。
嬉しき事に指を折れば、宿の小犬の病の癒えたる、失せ
ぬと思ひし頂戴の歌集見出でたる、勝手もと働くいと
よき女子の参りたる、猶それよりも妹が例の支度にと
御相談願ひし染物のこと、あがり殊に見事にて、少しも
派手なることはなく、當人の喜、一重に御すゝめ故と辱
く嬉しく候。日毎のやうに御めもじゝて、猶物足らぬ心
地に候ひしを、況して此の朝夕の淋しさ、文参らせたき
にも御宿り定まらねば、何とかはし候はん。日々に此の
愚痴申出しては、妹に笑はれ申候。御歸京は來年とや、ゆ

るくくの御ありきに書きあつめ給はん御旅日記、拜見
いつと樂しみ居候。此の次の御文は又いつ頃の御便り
なるべき、其の程いと待遠にも候かな。やがて時雨れん
紅葉のかげに御風めさぬやう御心用ひあらまほしく、
其の事祈り居候。かしこ。(種ロー葉)

三一 世界の歌枕

大西洋の浪は、太平洋のとは幾分違つてゐる。太平洋の浪は
大きく緩く打つが、大西洋のは、多く天氣が悪い爲か、とにか
く稍小さく鋭く感じた。空の色の關係もあらう。大西洋の空
は澄んだ藍ではなくて、稍黒ずんだ時としては鉛のやうな

(一) San Francisco.



色に見える。だが緯度が次第に高くなるにつれて、浪の色は淡く、入日の華やかさは違はないが、夕雲の色彩も漸くあつさりとして、南海の絢爛な色よりも却て美しい。

太平洋で私の遇つた大浪は、桑港に著く三日ばかり前の一日であつた。小山の如き浪が寄せかへるので、さしもの大船も木の葉の様に動搖したが、幸にも、此の日は頗る上天氣で、風もなかつた故、甲板の上でその壯

(三) Hawaii.

(二) Golden gate.

觀を味ふ事が出来た。大西洋の方は、一體に山なす巨浪は少ないが、米國を去つて五日ばかりの一日、暴風雨に類した天氣に出遇つた。要するに、海の景色は取出で、人に語る事は難いが、一度經驗のある者が後日追想すると、單調な様で實は千變萬化の美を憶ひ起す。これ實に究竟の歌枕。又桑港の港近くなつた海の上、數百羽の鷗が船に沿うて舞つてゐる所から遙かに眺むれば、金門灣頭の大浪が港口に押寄せる有様、水の屏風を立て廻した如く、海の上にも瀧があるかとも疑はれた。これはた歌枕に逸すべからざるものと思ふ。陸上の景色は、土地によつて著しい相違がある。布哇（三）の如き、四時氣候を同じうして、太平洋の樂園と稱せられる地に行

くと、満目の風光一變して、はじめての人には非常に面白い。遠淺の海が極めて澄んだ萌黄の色に見えて、それに椰子の林をあしらつた風情は、繪畫で見るとよりも、實際の方が不思議なくらゐ美しい。これからの人が歌枕の一つとすべき處だと思ふ。その地の公園に遊んだ時、蔚然たる榕樹の下枝に放し飼の孔雀がとまつてゐて、そのあてやかな羽毛が、花のやうであつたのを記憶する。

熱帶地方はいふまでもないが、歐米の風光は、日本に比していたく趣を異にしてゐる。かの國には、わが國よりも草木が尠ない。見る山も見る山も、日本の様に松杉が山全體を蔽うては居ない。あるは芝山の如く、あるは只岩石のみのやうな

山の處々に、偶々青々した樹木が十數本繁つて居るといふ風の景色が多い。それで日本人は動もすれば、わが國の景に草木の多いのを誇稱するが、それは稍偏した見地であつて、兩方ともにそれらの美しさがあるのは無論である。併しながら極めて土地の礪確なのは、勿論景色が好いとはいはれない。私の通過した米國の一部分は、殊に冬枯の候であつたから、人氣ないもの寂しい廣漠の野を行く心地がした。概してあちらの木はひねくれてゐない。皆すうつと直立して、地面を離るゝ數尺の處から、四方に向つて枝が規則正しく手を擴げてゐる。かう規則正しくなつてゐる枝振は、いかにも風趣が乏しいやうではあるが、實際はさうでない。

(一) Wyoming. 北米合衆國西部の州名。

(二) Salt Lake.

(三) Colorado.

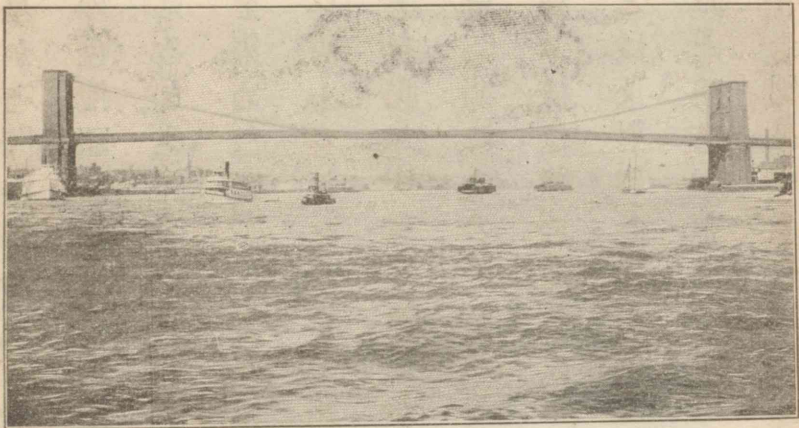
(四) Cañon. 名高き峽谷。

更に亞米利加の歌枕一二を挙げると、先づワイオミングの平原であらう。眼の届くかぎり一物もなく、雪がちらく降つてゐる中を、たまに羊の群が鐵道線路のあたりをさまよふなどは、優美な姿には缺けてゐるが、一種壯大な趣がある。名にし負ふサルトレークの鹽の湖を中斷する長路を通ると、平原の間に丘陵の起伏して、雪斑らの岩角に朝日の反射する景色、これ亦歌枕の價值あるものといはねばならぬ。又コロラド州の北、所謂キャニオンの一部は、奇石、怪岩路傍に磊々として、さながら鬼工と思はれる。この景も歌枕に逸すべからざるところである。

扱、この歌枕といふ詞は、も少し意味を廣くして見たいと思

(六) B ooklyn.

(五) Sky-scraper.



橋ンリクールブ

ふ。即ち山水の風景ばかりに止めず、進んで紅塵萬丈の市街、煤烟の立昇る工場の光景なども、詩歌に寫し出して面白からう。例へば紐育(五) スカイスクレパーの摩天閣の如きも、その或物は建築美を持つてないが、中には一種の新しい趣味の徹底して居るものがある。ブルークリンの釣橋の上から紐育を望むと、建列ねた大廈高樓が雲に聳えて、殊に薄暮は、二十階・三十階の窓の灯が空の

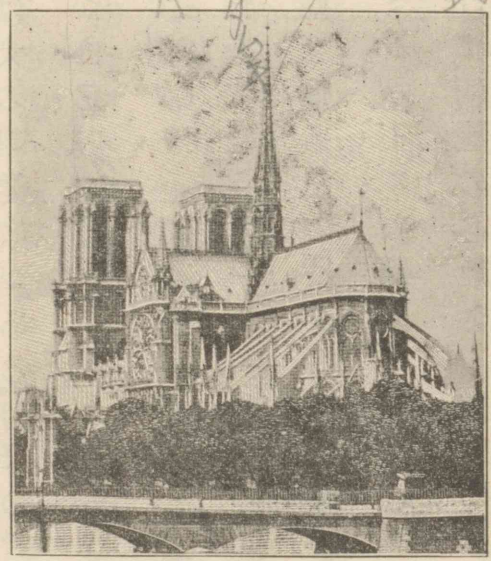
(五) New England. (四) Wall-street. (三) Barrel-organ. (二) Madison. (一) Hoboken.

星かと閃いてゐる。又はホバークンの港口、朝霞の景色、夕暮の色、他國に無い趣致がある。更に人情風俗を加へて景色を見ると、愈好箇の歌枕がある。紐育マヂソンの大辻、世界の富を集めた繁華な場處に立つて、伊太利の移民が弾く哀なパレルオルガンの聲を聞けば、聲こそは細けれ、近代文明の弊害を呪ふ切實な音楽かとも聞える。ウォルストリートの執務時間に、その邊を通ると、黄金の爲に、萬人の血眼になつて狂ふ様に、賭博場を見るよりも猶慘澹たる感を催す。又これとは反對に、冬の田舎に入つて見るに、葉の落盡した楓樹の竝木路を、雪を蹴つて小學校生徒の走つてゆく所などは、若き米國萬歳の聲を發したい位。ニウイングランドの田舎の

上ノ丸イ
ツカニケニ
ルネサンス

(七) Champs Elyse.

(六) Paris.



院寺ムダルトーノ里巴

景色は、落著いて若々しい、如何にも懐かしい感を與へる。

歐米の大都會中、どこが好いといはれたなら、誰も誰も賞めるのは巴里であらう。市街の美觀道路の整頓はいふに及ばず、氣候の溫和、風光の美、風俗の雅致ある、かういふ處に住んで詩でも詠んでゐたいとは、誰しも望む所かと思ふ。ジャンゼリゼエの大通は、長安の盛時ものか、端麗高雅、實に世界第一である。歌枕はどこにもごろとくしてゐる。文明の最高に

(一) Seines. (二) Notre dame. (三) Gothic-style.

(四) St. Michel.

位するは佛蘭西である、而して巴里である。それで又極めて華美な中にも、何となく仙人めいた趣もある。車馬絡繹たるセエヌ河の邊りに悠然綸を垂れる隠君子もある。橋の下には、犬の理髮床がある。河岸の石垣の上には、お馴染の古本屋がある。その他、ノートルダム寺の建築は、ゴシック式の標本で、朝夕の色の變化が著しい。嘗てノートルダムの總ての變化を味はうと、一日一晚の閒眺望した事もあつたが、最も美觀を極めたのは夕方で、黄金の光の波を浴びた景色を、サン・ミシエールの橋より眺めた時であつた。又夜のしらとあけに、朝風の心地よく頬を拂ふ時、之を望むのも好い。眞珠の色を曇らせた様な色から、薔薇色のはでやかなのに至る迄

(五) Charlotte. (六) Percheron.

(七) Turner. (1775-1851)

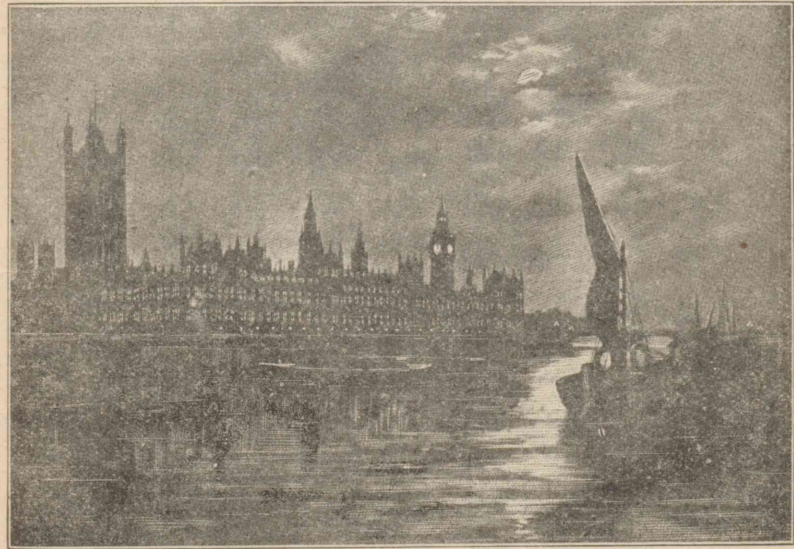
(八) Thames. (九) Richmond.

の色合の微かな影を味ふ事が出来る。その外、花を賣る老媪の風、シャルロットの帽子を被つて、ポールの箱を抱へた店通ひの賣子の姿、ヘルシロンといふ、牛よりも大きい馬を曳く馬丁の振、夜半近く芝居のはてに雨が降つて、幾千の街燈の光が敷石に映る處、自働車は唸り、馬車は軋る不夜城の壯觀、満目の時勢粧、皆歌枕ならぬはなしといふ趣がある。

倫敦は、景色の地として、さほど人は賞めないが、色彩の變化、その色合の豊かな點は、ターナーの繪にある通で、風俗美は尠ないが、光線の變化ばかりは味ふ値がある。併し同じく風光を味ふにしても、住心地よい巴里の方が、あらゆる旅客の賞揚する所だと思ふ。たゞ倫敦にも、テムズ上流、リッチモ

(一) Napoli.

ンド近傍の兩岸の風景などには英國特有の美觀がある。この他、風車、朱い屋根、清き淀に名ある和蘭もよく、伊太利にはナポリあたりの夢の様な景色も好い。瑞西は風光明媚と稱せられる國で、誰も皆賞揚するが、私は寧ろ南獨逸を採る。南獨逸ザルツブルヒの景は日本によく似てゐる。



景夜の畔河スルツブルヒ

(二) Salzburg.

(三) Red Sea.

要するに、何處が一番風光は絶佳であるかといふ問題は、一概にはきめ難い。見る人の心々によつて、天下到る處、如何なる地、如何なる處と雖も、皆相當の美を味ひ得るものである。浪の激しい英海峽の船の上でも、暑さ堪へ難い紅海の甲板でも、それらの美しさが感ぜられよう。元來、歌枕など、取出で、きめるのは、或は間違つてゐはしまいか。天下皆歌枕ではあるまいか。

私の旅行は、學術研究の爲でもなく、また特別な使命を帯びたのでもない。只漫然と飄遊したので、感覺を通して、かゝる印象を捉へただけであつた。(上田敏「心の花」)

三二 黃菊白菊

黃菊白菊、その他の名はなくもがな。
 行水のすてどころなし、虫の聲。
 村百戸、菊なき門も見えぬかな。
 色々の穂を吹出すや、秋の風。
 七夕や、對の娘に對の竹。
 小坊主が高名されし茸かな。

嵐雪 鬼貫 蕪村 几董 太祇 一茶

女子國文教科書 修正六版卷五 終

女子國文教科書 全八册

明治四十四年十二月廿二日印
 明治四十四年十二月廿五日發
 明治四十五年三月十五日訂正再版印刷
 明治四十五年三月十八日訂正再版發行
 大正元年十月八日訂正三版印刷
 大正元年十月十一日訂正三版發行
 大正元年十月廿三日修正四版印刷
 大正元年十月廿六日修正四版發行
 大正五年五月廿五日印刷
 大正五年五月廿八日印刷
 大正六年一月十七日印刷
 大正六年一月十七日印刷
 大正六年一月十七日印刷
 大正六年一月十七日印刷
 大正六年一月十七日印刷

定價各金三拾錢
 大正七年度各金三拾五錢
 臨時定價



編者 佐々政一
 發行者 上原才一郎
 發行所 光風館書店
 印刷者 四海民藏

東京市小石川區大塚窪町八番地
 東京市神田區裏神保町六番地
 東京市神田區裏神保町六番地
 東京市神田區裏神保町六番地

(電話本局二千三十九番)
 (振替口座東京三二七番)

本館發行 of 教科書は常に多數の製本準備有之候につき萬一各地賣捌所に
 賣切等にて課業に御差支の節は直接御注文被下候はゞ直に御送附可致候

本三
水野
小治